

フォーラム概要

パネルディスカッション

「中山間地域におけるこれからの防災対策

～震災の経験を活かす～」



**10月6日 パネルディスカッション
(米子市文化ホール)**

○ 司会

お待たせいたしました。午後の部パネルディスカッション「中山間地域におけるこれからの防災対策～震災の経験を活かす～」を始めさせていただきます。それではコーディネーター、パネリストの皆様にご登場していただきます。皆様、拍手でお迎えください。それでは出演者をご紹介します。皆様から向かって左から、コーディネーターの日本災害復興学会会長室崎益輝様、パネリストの新潟県知事泉田裕彦様、中越復興市民会議代表稲垣文彦様、レスキューストックヤード事務局長松田曜子様、最後に平井伸治鳥取県知事でございます。ここからの進行は、コーディネーターの室崎様にお願いしております。それでは室崎様、よろしくお願いいたします。

○ 室崎 益輝 (コーディネーター)

ご紹介いただきました室崎でございます。それでは早速午後の部に入らせていただきます。「中山間地域におけるこれからの防災対策～震災の経験を活かす～」ということで、パネルディスカッションを始めさせていただきます。テーマは「中山間地域におけるこれからの防災対策」というところに集約されておりますけれども、そのサブタイトルで「過去の経験を活かす」というようなことがございます。今日お越しいただいている泉田知事と稲垣さんは中越地震と中越沖地震もご経験になって、新潟から来ていただきましたので、中越地震なりそういう地震の経験とその後の復興の経験を踏まえてお話がいただけるというふうに思っています。それからレスキューストックヤードの松田さんは、能登半島地震の穴水というところの復興にずっと携わっておられますので、能登

半島地震の経験を中心にお話をいただけるかと思えます。ただ、松田さんはいたるところの被災地に駆けつけておられますので、新潟の話もお聞きできるかもしれません。最後はご存知だとは思いますが、ご当地の平井知事でございます。平井知事は先ほどの午前中でもご紹介ありましたように、10年前の鳥取県西部地震の時に米子におられて、その直後の応急対応から復興まで陣頭指揮を執られたということなので、鳥取県西部地震の経験を中心にお話いただけると思えます。そういう地震の経験、あるいは復興の経験をベースにしながら、テーマとしてはさらに、今後の中山間地域の防災はどうしていくのか、という議論もしようと考えています。いままでの復興だけではなく、復興に続く予防のところまで見通したお話をいただけるのではないかと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは最初に、「中山間地域におけるこれからの防災対策」という今日のテーマについての最初のメッセージを、皆さんからいただきたいと思えます。こんなことに今関心を持っているとか、あるいはこういうことを特に今考えているというような事がそれぞれおありかと思えます。それぞれの経験を基に中山間地域の防災ということでイメージされること、あるいは日頃からお考えになっていることを、自己紹介を兼ねて、皆さんにお話が伺えればと思えます。おおよそ一人7分という時間配分がございませうけれども、あまり気になさらずにお話ください。席順といたらおかしいですけど、舞台から向かって左から、泉田さんから順番にお話を伺うという事にしたいと思います。泉田知事、よろしくお願いいたします。

○ 泉田 裕彦 (新潟県知事)

皆さんこんにちは。本日は大変に貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございました。



地震から10年目という事で被災された方々には心よりお見舞いを申し上げます。そしてまた新潟県、最近大変大きな災害に続けて見舞われました。その際、全国から大変暖かい

ご支援をいただきましたことを深く御礼申し上げます。実は私、6年前に発生した中越地震、その時には知事になる直前でした。前任の知事さんが花束を貰って金曜日に退庁した。私、月曜日の午前0時に就任予定だったんですけども、何となく「これから48時間、嫌だよなあ」と感じていた土曜日の午後5時56分の地震ということでした。山が崩れたという感じじゃなくて山が動いた。道路が無くなった。そしてまた中国の四川大地震でもありましたけど、まさに河道閉塞、震災ダム。いろいろ言い方はあるんですけども、川を動いた山が堰き止めて家がどんどん沈んでいってしまう。これは自衛隊始まって以来ということだったんですけども、2200名の村民、山古志村と当時言いましたが、全村避難という事になりました。この時の命がけで救出作業をしていただいた皆様方のお話等々をすればキリがないところではありますけども、この孤立の問題、それから高齢化が進んでいる中山間地域の被災者の情報をどのようにケアするのか。さらには避難した後、特にこの板間で秋口から冬にかけての避難というものが、いかに負荷が掛かるものなのか。そしてまた、寒い時期になってきますので板間に居るぐらいなら車の中で避難しようという方も大勢おられました。エコノミークラス症候群で、40代の女性が亡くなるという事も発生しました。いかに万が一、地震が発生した時にアメニティーを良くしていくのか。また、高齢のおばあちゃんなんかはお茶を飲まないんです。そうすると血圧が高く

なって心臓麻痺が起きたり脳溢血が起きたりする。何で水飲まないかっていうと、外にお手洗いに出るのが嫌だと。仮設ですから。そうするとお手洗いに行かずに済むように水を控える。それがまた命に係わるというふうな事になりますので、いかに避難所ってもののアメニティーを高めるのかと。また冬の時期インフルエンザをどう防ぐのかというような課題山積ということもありました。孤立を防ぎ情報をシェアし、そしてまた避難した人の生活をいかにサポートするか。そしてまた今度、復興にも長い道程がありまして、6年経ったとは言えまだ復興途上という中で、高齢化が進む社会の中でどのように地域を復興させていくかと。課題山積というのがまさに中山間地域の災害ではないかなというふうに思っています。今日はこういう形の場を設定していただきましたので、まさにこの防災分野で活躍されている皆さま方と知見を共有して、そしてまた将来に向かって災害ゼロになればいいんですけど、なかなかゼロにすることは難しいという中で災害にあっても命を守り、そしてまた被害を小さくするような、経験を将来に繋げて行く機会になればなというふうに思っています。私、実は前職の関係でIT、電気通信等の最先端の産業振興ということを目指して知事に就いたという経緯があるんですけども、結果、防災を相当何度もやることになりまして、知事会でも災害対策特別委員長というものを仰せつかっています。今日いただいた意見というのは是非、国の中央防災会議、そしてまた知事会の中の議論というのにも役立たせていただきたいなと思っています。平井知事も是非、災害対策特別委員会に入っていたいただければと思っていますので、これを機会によろしくお願いできればと思っています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。それでは続いて稲垣さん、よろしくお願いいたします。

○ 稲垣 文彦 (中越復興市民会議代表)



はい、ご紹介いただきました稲垣でございます。新潟県の長岡市からやって参りました。まずは自己紹介をと思っておりますけれども、私、中越復興市民会議の代表ということ

で今日ご紹介いただいております。何者かと言うとですけれども、中越地震がございまして、その後私も様々なボランティア活動をやったんですけども、その後この中山間地域の復興を見ると、行政と住民だけではちょっとピースが足りないんじゃないかなあというところで、そんな中で仲間と一念発起しまして、実は民間で復興支援団体を立ち上げました。その団体が中越復興市民会議という団体でございます。その中でも震災から6年が経っておりますけれども、復興当初は、泉田知事が今日隣にいらしておりますけれども、新潟県の皆さん、泉田知事もそうですけれども、一緒になって現場に入って、行政も民間もみんな一緒になって現地に入って何が課題なんだということを話しながら進めて来たというのが正直なところでございまして。そんなようなことをやってきました。復興の中でやっているのは、先ほど山中先生からもお話がありましたけど、「よそ者・若者・ばか者」のあの作用を使って、震災復興という事で壊れたものを直すのもそうなんですけれども、それ以上に今までの見失っていた地域の価値だとか、良さを再確認しよう。そういうような中から地域の力を引き出して、それを力に復興していこう。こんな様な活動をやっている人間で

ございます。現在は、今は、これもまた新潟県独自のユニークな制度だと思っておりますけども、この「よそ者・若者・ばか者」をいっぱい増やそうじゃないかということで地域復興支援員制度というものが実は復興基金で行われていまして、これは何かと言うといわゆる若い人たちを雇用しまして集落の復興支援に役立てているんですね。一緒に農作業をやったりだとか、一緒にその集落の将来を考えたりとかっていう、こういう方々50名ぐらい今、新潟県にいますけども、この方々の人材育成なんかをやらせていただいたり、はたまた最近では災害の話なのか何だかよく分からなくなってきてまして、東京の大学生結構いますよね。あるいは今こういう経済状況ですから、ちょっと職を失った若い方がいらっしやいますよね。こういう方々に中越の被災地にインターンシップに来ていただいて、農業体験をしてもらっているんですね。1ヶ月ぐらい居るとどうも情が移るみたいで、「ここに残りたいなあ」なんてことを言うような若者も出だしまして、そんなことで実は最初は震災からの復興という事で随分といろんな事を危惧したんですけれども、被災地の皆さまは、今は結構みんな元気になってインターンシップの受け入れなんかもしているような状況になっています。こんなようなことをやっている人間でございます。今日は防災対策ということでございます。泉田知事はまさに最前線でおられて陣頭指揮を振られている方でございます。そういう中で防災対策は泉田知事にお任せしたいなというふうに思っております。とは言いながらも僕はちょっと角度が違った立場からお話をしたいなと思っております。1つは、いわゆる地域社会を人間に例えて災害を怪我に例えると、防災対策というのはいかに怪我をしないかとか、怪我をしたらどうやって治すかという話だろうというふうに思うんですけども、僕はその角度じゃなくて、そもそもその怪我をする人は実は

糖尿病だったんだという話でございます。糖尿病の人が怪我をしたらどう治していくのか。むしろ糖尿病を事前に改善していったほうがいいんじゃないかというようなそんな角度で今日は防災対策のお話をさせていただきたいと思っています。ですから、そういった意味では防災対策というよりも総合生活対策の中の防災対策みたいな切り口で今日はお話をさせていただきたいなと思っていますので、どうぞよろしくをお願いします。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。それでは続いて松田さんよろしくをお願いします。

○ 松田 曜子 (レスキューストックヤード 事務局長)



皆さんこんにちは。NPO 法人レスキューストックヤードで事務局長をしております松田と申します。NPO 法人レスキューストックヤードは

名古屋にある災害救援のボランティア団体です。1995年の阪神淡路大震災の際、全国から約130万人のボランティアが被災地に行きましたが、レスキューストックヤードは名古屋から行ったボランティアがその教訓を活かすという使命を持って立ち上げた団体です。以来、約30の被災地に何らかの形で関わっています。

今年は山口県山陽小野田市で7月に水害が起きて、そちらでボランティアと一緒に一週間ほど活動をしました。それから先月には、静岡県でも台風による水害が起きました。こちらはボランティア活動用の資機材をお貸しする活動を行いました。名古屋では2000年に東海豪雨と水害があったんですが、その時の寄せられたデッキブラ

シ、タオル、雑巾、一輪車といった資機材を今でもボランティアがメンテナンスをしまして、災害が起きたら貸し出すという活動をしておりません。

私自身は千葉県の団地で生まれ育ちました。大学時代の恩師が過疎の研究をしていたものですから、智頭町で過疎の地域をどう活性化するかということで通ったこともあるんですが、なにぶん都会育ちなので「なぜ活かさなくてはならないのが理解できない」というまま過しました。「人が少ないんだったら仕方ないんじゃないかなあ」って本気でその頃は思っていました。ところがその後、地域防災というテーマに出会って、その勉強を修めた後に、このレスキューストックヤードという変わった団体の職員になりました。就職予定だった平成19年の4月の一週間前、3月25日に起きたのが能登半島地震でした。事務所にはだれもおらず、右も左も分からないまま石川県の穴水町に連れて行かれたのが最初の被災地経験でした。

ここは人口約1万人で高齢化率が約35%ですね。大変高齢化が進んだ小さな町です。夢中で支援をしているうちに1年半、2年ぐらい経ちまして、私の中に第二の故郷という心が芽生えてきた気がします。能登の人たちが病院がなくなるだとか、地震が終わっても商店街が復興しないだとかいう問題に取り組んでいる姿を間近で見ている内に、「あの時、智頭町の人たちがなぜ地域活性化と言ったのかな」ということが段々肌で感じられるようになって来ました。今でも東京にいる友人は都会生活を満喫しているんですけども、やはり両方あって日本なのだというのを感じていますし、今は私は名古屋という都会と能登、あるいは災害の仕事を通じて全国の被災地に行く事も含めて、行き来する事を個人的には満喫できる仕事に就いています。

今日は私は一番の若輩者ですので、見てきたことしかお話できませんけれども、皆さんとともに若い人が中山間地にどうやったら目を向けるかという事を中心にお話しできたらいいというふうに思っています。よろしくお願いします。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。最後は平井知事さんです。皆さんよくご存知かもしれませんが、個人的な自己紹介あるいは個人的な思いを含めてお話しただければと思います。よろしくお願いします。

○ 平井 伸治 (鳥取県知事)



今日は、こうして本当に全国各地の皆様にお集まりいただき、パネルのほうにも室崎先生、泉田知事、稲垣さん、松田さんにご参加をいただきました。本当に遠くからや

て来ていただきまして誠にありがとうございました。泉田知事は、この後すぐまた飛行機に乗って帰らなければいけないという事で、この2時間だけ山陰にいるというハードスケジュールでありますけども、本当にありがとうございます。泉田さんとは歳も近く、本当に仲間のように付き合いさせていただいております。その盟友から先ほど災害対策特別委員会に入るようにと言われたので、この場で加入をさせていただきたいと思えます。ただ人使いが荒いんじゃないかなあと心配しておりますけども。ともかく一緒に防災の町づくりを地域から考えて生きたいなあというふうに思っています。遠くからお見えの方もいらっしゃいますので、少しこの界隈の宣伝をさせていただきたいと思えます。例えば大山ですね。非常に綺

麗に見える山であります、「ゲゲゲの女房」でドラマの冒頭に出て来るんです。最初に山が出て来ますけども、あれが大山の絵でございまして。ただドラマ中ちょっと私気に入らないのは、あれをここら辺では「伯耆富士」と呼ぶんですが、ドラマの中では「出雲富士」と呼んでいまして、鳥根県の領地になっている訳でございまして。まあ仲良くやっておりますから、山陰両県はですね。どっちでもいいんですが。この大山もですね、ご参考までに申し上げますと、地震の前、10年前より前、10月6日より前は1,711mという標高だったんです。それが地震が終わってみますと、1m半ほど下がりました。1,709mになりました。やっぱりそういうところにも影響があるんだなあということを思い知ったわけであります。また米子界限ですと、皆生温泉という素晴らしい温泉がありまして、是非皆様にもお訪ねをいただければなと思えます。これは海から湧いている温泉でございまして、100年ほど経っておるわけでございますけども、大変お肌にいいですね。今日もたくさんいらっしゃいますけども、綺麗な女性が増えます綺麗になります。それなりの方もそれなりになんていう話もあります。まあそれはどうでもいいんですけども、スリミングステイという新しい商品もありまして、皆生温泉では皆生温泉に泊まっていたいただきますと、帰る頃には3%ほど痩せて帰るといふ、是非お試しいただければと思えます。ただし、個人差があるようでございます。まあそういうわけでいろいろと風光明媚なところでもありますので、この際お楽しみをいただければというふうに思っています。実はこうして全国からお集まりいただくシンポジウムを開いて、昨日驚いたのは10年前にお会いした人にお会いしました。それは三宅島のネットワークの宮下さんでございまして。10年前にここが地震になりました。10月6日に大地震になりました

て、全国の人に助けていただいたんですね。その恩返しをしたい。三宅島の大噴火がそれから2ヶ月ぐらい後にございまして、これは大変だと。自分たちも大変だけど他人事でないと。そういうふうに決心をいたしまして、県庁も一緒になって私自身も東京都の副知事の青山さんという方に掛け合ったんですけども。今度、三宅島の交流集会があるので集まってくれと。「じゃあそこに鳥取からも応援に行きます」と言って応援のメッセージを持って行ったんですね。その時に合わせて皆生温泉のお湯まで運んで持って行きまして。三宅島の方々びっくりされて、どうやって運んできたのかなあと。飛行機で運んだんですね。青山副知事と謀りまして、全日空にタダで運ばせるということをしていただいたんですけども。そんなようなことで、そうした会に司会をされていたのが宮下さんでいらっしゃるわけです。災害というのは厳しいものではありませんけども、それで人間がいろんな経験をします。実は鳥取県もそうですし、神戸の人もそうですし、新潟の人もそうですけども、「大変だったなあ」ということでその時は無我夢中ではありますが、その後いろんな人の輪ができたり、自分の中に何か成功体験と言っているのかよく分かりませんが、しっかりと何かができるような気がします。だから、我々はこうして同じ体験を共有した者が集まったせっかくの機会でありまして、是非ともこのシンポジウムを通じていいネットワークが盛んに生まれてくることを期待したいと思います。それからもし遠方からお越しのお客様がいらっしゃれば、私今ちょうど県議会の真っ最中でございまして。常に県議会議員から言われますのは、鳥取県はお金が無いという話でございまして。皆様には是非お帰りの際には梨を両手にいっぱい買って帰っていただきますと、幾分か地元も喜びますので、よろしくお願いを申し上げます。梨は重た

いという方は、ご当地はネギを作っておりますのでネギでも結構でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○ 室崎



はい、どうもありがとうございました。4人の方からそれぞれ自己紹介を兼ねて、震災と係わるいろいろなエピソードとか思いを聞かせていただきました。みなさんの話は、最初の切り出しということで、穏やかな話ぶりではありましたが、その中で重要な問題が既にいくつか指摘されています。それを簡単に整理させていただくと、1つは災害直後の応急対応から復旧に至るプロセスでの中山間地に係わる問題がご披露されたと思います。交通遮断等による孤立の問題や、情報がなかなか共有できなかった問題、そういう中山間地の孤立の危険性に関する話が皆さんからご披露いただけました。あるいは災害直後のケアの問題や非常に厳しい生活の問題も話されました。秋から冬にかけての話が出ておりましたけど、これも中山間地だからこそその問題です。都会よりもずっと厳しい環境に置かれているということですね。災害直後の課題を中山間地との係わり合いで出していただいて、それをどういうふうに考えるのかということも、今日議論すべき一つのテーマのように思います。

2つ目は、その後の復興のプロセスに入るんだろうと思いますけれども、その復興の担い手に関する話が幾つか出されています。稲垣さんから「よそ者・若者・ばか者」ですかね。少し外からの支援者と被災地の関係みたいなもの。あるいはそれをどういう形で担っていくのかというお話が出されました。復興過程の重要な問題として、復興過

程における人と人との繋がりのような話が出されたように思います。最後の平井知事の話も、人と人とのネットワークに関する話でした。それは、災害直後の繋がりもありますけど、それ以降の繋がりにも関する話でした。震災があったからこそ新しい人間の繋がりができて、それが一つの財産になっているという話もありましたので、復旧復興の中で生まれる人の繋がりみたいなものをどういうふうに考えていったらいいかっていうのが2つ目の大きな課題であったように思います。この中で稲垣さんが地域復興支援員制度と言われましたけど、今日午前中のシンポジウムの中では平井知事が鳥取県の「職員災害応援隊」に触れられました。支援する人の仕組みをどうつくるかという問題です。復興支援員と災害応援隊というような、災害の中で新しい仕組みが生まれてくるというようなことも、人の繋がりということに関係するのではないかと考えているところであります。松田さんの話も「よそ者・若者・ばか者」に関係する。松田さんがばか者っていう訳ではないですけど。そういう若いエネルギーがやっぱり被災地の中に入っていきことによって、新しい力が生まれてくるということです。そういう人と人との繋がりがっていうようなことが凄く大切なかなあという感じに思っています。

それから3点目ですが、もうちょっと長期的な話として重要なテーマが幾つか出ております。泉田さんから「知事会の災害対策特別委員会で頑張りましょう」という話がありました。これ凄く重要な話だと思います。これから日本の制度をどう考えていくのかという時に、やっぱり地方の声をしっかり集めていくことが欠かせません。そうすると知事会の役割は大切です。泉田さん今、中央防災会議の委員もされているわけですけども、地方でも中央でもその政治の仕組みを変えていくことも忘れてなりません。最後に時間があつたら、

どういう形でこの国の仕組みを変えるのかっていう話もしてみたいと思います。いずれにしても重要なキーテーマは幾つか出て来たわけですけども、これらの問題についてでもいいですし、それに係わる他の問題でもいいんですけど、これからの中山間地の防災問題の解決のあり方みたいなことについて、ご発言をいただきたいというふうに思うのですけれども。じゃあ、泉田さんからよろしくお願いします。

○ 泉田

それでは、問題提起をさせていただきたいと思っています。中山間地域の地震というのは規模で言いますと、首都直下型とか阪神・淡路に比べるとどうしても小さくなると。そのために国の考えている体系も今度3つ一緒に来るかもしれないという話はあるんですが、東海・東南海・南海と。この超大規模震災、首都直下型をどうしようというところにどうしてもウエイトが掛かっているという印象を持っています。平井知事に是非入って欲しいとお願いしたのは、中山間地域で起きる地震のほうか頻度は遥かに多いということになりますので、やはりいざっていう時にどう備えるかという課題、これは多くの人の苦しみを引き下げることに関わるんだと思います。この災害関係の話をしていろいろしてみると、感じるのは経験したところは分かるんです。ところが体験してないところの都道府県というのはどうしても熱意に差が出てしまうというようなことがあるものですから、この経験をした知事さんが入っていただけるというのは非常に有難いと思っております。その中で本当に困るというのは何かと言うと、中山間地域もそうなんですが、実は大都市もそうだろうと思っているんですけども、地震に限らず「7.13水害」というのも実は6年前に新潟県は同時に経験しました。一週間ぐらい経ってからようやく2

階に避難しているお年寄りを発見するということもありました。結局、自主防災組織、それから消防団というものはまったく違うものだと思っています。どういうことかと言いますと、消防団というのは特別職の地方公務員ということですから、サービスを提供する人ということになります。これは行政の職員も同じです。サービスを仕事として提供すると。自主防災組織というのは隣近所お互い助け合いましょうというもので、全員がメンバーになっているわけです。おばあちゃんがどの部屋で寝ているはずだと近所で知っている人がいる場合と、行政が電話で確認していくというのはまったく違う意味があると思っています。実際様々な訓練とか、災害の中でもはっきり感じることは、自主防災組織があれば3時間あると安否確認が終わっちゃうんです。ところが第三者の機関が確認をし始めると、半日経ってもまったく進まないという、そういう大きな違いがあると思っています。ここで一番課題になるのが、名簿を自主防災組織が持ち得るのかどうか。みんな自主防災組織、お互いがメンバーだから持っていればいいんですけども、なかなか近所付き合いが疎遠になってしまっている。行政は、福祉セクションが災害時要援護者の情報を持っています。ところが個人情報保護法、特に行政機関個人情報保護法というのがありまして現場が萎縮してしまっている。どういうことかと言いますと、福祉セクションは情報を把握しているんだけど、「防災セクションで情報を共有するのはけしからん」という感覚があると。さらにその行政が持っている情報を「自主防災組織に渡していいんだろうか」というところで、凄く現場が萎縮をして渡せなくなっちゃっている。これは震災の後に内閣府に言いました。「この個人情報保護法、本人のメリットになるやつ。とにかくちゃんと使えるように法改正をしてくれ」ということを申し上げたんですが。

結果はどうなったかという、今の法律でも使うことは可能であるという通達が出ました。でも、じゃあそれで現場がうまく回るかっていうと、「あなた何で私の個人情報を聴きにくるのよ」っていう人が一人いるだけで、そこから先、名簿作りが停滞をしてしまう。今、新潟県で推奨しているのが、逆手上げ方式なんですけども、「名簿に登載して欲しくない人だけ手を挙げてください」というやり方でやるんですが、政令市ぐらいなってくると、その逆手上げ方式すらできないということになっていますので、やはり行政が持っている情報、命に係わるような情報っていうのをやはり自主防災組織ごとにしっかりとシェアをしていくという、そういう体系を作っていかなければいけないのではないかなあというふうに思っています。ちょっと一つお話を紹介したいと思うんですが、自主防災組織ゼロの市っていうのが県内に一つだけあるんです。これ何でかって言いますと、自主防災組織を作ると戦争になるって言う首長がいてですね、作れないということなんですけども。災害時にお互いに助け合って命を守るにはどうしたらいいかっていう国民的コンセンサスっていうのをやはり作らなければいけないんじゃないかなということを強く感じています。このへん個人情報の保護とのバランスの中で皆さんどのように感じられているのかという点も含めて、いざっていう時に命を守るための仕組みがどうあるべきかと議論をしてみただけると有難いなと思っています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。ちょっと一通り問題を出していただいて、幾つか重要な問題について議論するという事にさせていただきたいと思います。続いて稲垣さん、いかがでしょうか。

○ 稲垣

はい、私からの問題というか課題ですけれども、先ほどは怪我と糖尿病の話をしましたけれども。中山間地域の防災対策、これは鳥取県だけじゃなくて全国の話でございますので、そんなふうに捉えていただければと思うんですけども。もう皆さんもたぶんご存知だし、そう思ってらっしゃるでしょうけども、やっぱり防災ということに関しては、当然、行政も一生懸命頑張るんですけども、地元の皆さんが一生懸命頑張っていくことが大事です。お互いに助け合ってやっていこう。そういう「自助・共助・公助」じゃないですけどね。それも間違いなくそうなんですよね。なんだけれども、ただなかなか取り組めないというのが実態であろうということでございます。実はちょっと広い意味での防災という、糖尿病みたいな話をしたのは何でかって言うんですけどね、実は中山間地の方々は今、災害よりもむしろ日々の日用品を買う場所が無いとか、あるいはバスが無くなりそうだとか、あるいは医療機関が遠いとか、日々生活するほうが危機感を持っているところなんですよね。災害よりそっちのほうが心配だと言う方が多い。ですから僕はそういった意味でも、そういう方々がやっぱりそれも実は住民が協力し合ってやっていかなきゃいけない課題だと思いますけども、そういうものも含める中での防災対策を進めていくべきで、防災だけをやっても難しいんだらうなあという視点からお話をさせていただきます。どうやったらやる気になるかという話なわけですけども、どうしてもこれ新潟もそうだったんですけども、中山間地の方々は、「まだ元気だ」と言ったり、「もう少し頑張る」とおっしゃっているけど、どこかあきらめ感がある。もう自分たちは何やってもこれ無理だなっていう感じはある。先ほど山中先生がおっしゃっていましたが、「こんな村にいたら駄目だ」と。「よく勉強し

て早くいい大学を出て立派になって東京に行って就職しなさい」とずっと子供を育ててたわけですね。その夢が叶って過疎高齢化になっているんですから、ある意味夢が叶ったみたいなのところもあるんですけども。そういう意味では実は僕が思っているのは、過疎地域の方々は誇りを失っているのではないかなと思っています。その地域に住むこと、あるいは自分たちの誇りを災害が無くても失っていると。そのような状況のなかで、の中で傍から「頑張れ」と言ってもなかなか難しいんだらうなあというふうに思っているんです。その地域の暮らしをどう認めてあげるかっていうことがまず一番大事なんだらうと。そこに実はさっきの「よそ者・若者・ばか者」がいいんだらうと思うんです。自分たちじゃ見つけられないその地域の価値、あるいはその地域の食べ物の美味しさ、空気の良さ、おばあちゃんの農作業の素晴らしさとかね。そういうものを大学生だとか若い人が見て、「あー凄い。おいしい。楽しい」と言っていると、おじいちゃんおばあちゃんは、まんざらじゃなくなってくるんです。こういうことを繰り返す中で誇りを取り戻していく。この過程が凄く大事なんだらうと思っています。だからどこかの専門家が来たりとか、どこかのコンサルタントが来て、「この村をグリーンツーリズムで良くしましょう」とかですね。そんなことを言ってもなかなか動かないでしょう。それよりもさっきの大学生の若者とかが入って暮らしを認めてあげる。その中で誇りを取り戻していくことが大事なんだらうなあというふうに思います。実は中越もこのようなことが災害によって起きたんです。たまたま。災害ボランティアっていう「よそ者・若者・ばか者」が来たんで。それで3年間そういうことをみんなやり続けてきて、被災者の方が何て言ったかという、災害から2年までは「地震のせいでこんな村になった」とおっしゃっ

ていたんですね。「地震のせいでこんな村になった」と。「人も少なくなった」と。それが3年目、その「よそ者・若者・ばか者」と一生懸命付き合ったところ何て言ったかという、「地震のおかげでこんな村になった」と。これが大きかったです。この意識の転換。その中で「よし、じゃあ自分たちで頑張ろうじゃないか」という意識が芽生えた。この意識のもと、今、中越では自分たち集落での合言葉を決めて「自分たちで将来こうやって行こうじゃないか、村づくりを」ということをみんなで話し合ってそれに向かって活動をしている。そんなふうになってきたということなんですね。僕はこの変化をこんなふうに感じています。不安なんですよ。みんなたぶん将来の不安感を持っていらっしゃるんだと思うんです。中山間地の方々は特に。将来に対する漠然とした不安なんですよ。「この村はどうなってしまおうだろう」とかという。その将来に対する漠然とした不安だけれども、受動的な不安なのか、能動的な不安なのかで全然違って来る。だから「地震のせいで」って言った時は、ある意味凄く受身の不安感。「誰かに何かやってもらわなきゃ困る」とか、「偉い人がこういうふうに頑張ってもらわなきゃ困る」とか、あるいは「我々の手じゃどうにもならない」という不安感の中で「自分たちは何してもしょうがない。だからあきらめるしかない」という中での不安感と、そうじゃなくて「我々が何か頑張れば、この村は変わって行くんだ。何とかできるんだ」という不安感。これは大きな転換だと思っんですね。こういういわゆる能動的、「自分たちが何かやれば変わるんだ」という不安感の中で、住民と行政が協働して防災の町づくりだとか、地域再生だとかを行っていくことが大事で、諦めの中の受身の不安感の中でいくら住民に「やれやれ」と言ってもなかなか上手く進まないという。ここがやっぱり凄く違うんだと思う

んですね。そういった意味では実は本当に泉田知事が力を入れてやっていただいているそのユニークな地域復興支援員制度っていうのは、これは住民に自信を付けます。誇りを取り戻す支援をやっているんですね。これはユニークだし、見事だと思っています。実は国でもそんなことを始めています。新潟県のをパクったわけじゃあないんでしょうけど、総務省が集落支援員制度というのをやり始めていまして、いわゆる集落の誇りを取り戻す、いわゆる能動的な不安感を作り出す、すなわち「自分たちでやれば何とかなる」というような集落の意識転換をさせるようなプログラムを総務省がやっております。そんなようなことを実は上手く活用して、これ過疎対策なんですけども、過疎対策をうまく活用して防災対策をやってしまう。集落支援員を使って防災対策をやるっていうようなことをやっていけば面白いんじゃないかなあというふうに思っています。そんなような課題意識、ちょっと長くなりましたけども。何て言うのかな、防災だけっていう話じゃなくて、本当の今の自分たちの不安感を「じゃあどうしたら変えられるんだ」ということ目の線の中から自分たちで変えていってもらおうということが大事なんだろうなあというふうに思っています。ちょっと長くなりましたけど、以上でございます。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。続いて、松田さんよろしく願います。

○ 松田

はい。私たちは小さな団体ですから制度や仕組みを作るところが苦手なのですが、細々と様々なことをやっています。それで、さっき「よそ者」という話もありましたが、1年ぐらい前、神戸の地方新聞をたまたま見ていたら、私が行っ

ていた地域の役員の方が「行政は地震のあと交流、交流と言うけれども、交流じゃなくてまず自分たちの町のことを考えるのが筋だろう」という投稿をされているのを目にしてすごくショックを覚えました。でも言っていることは間違いありません。私もそれ以来、気をつけるようにしているのですが、よそ者が乗り込んで何かするんじゃないかと、私たちはあくまでも地元の応援団だと思いうにしています。

例えば、地震の直後、私たちはボランティアとしてその地域に入りますが、被災した自分の地域のために何かしたいと思っておられる地元の方は必ずいるんですね。それは例えば普段お茶会活動をしているお母さんたちであるとか、普段は別のボランティア活動をしている人たちだったりするんですけれども、そういう人たちでも災害時って混乱して何をしたいかわからない。そういう方々に対し、私たちが「では避難所でお茶会を開いてみませんか」という提案をするような活動を心がけています。そうすると、例えばその中から穴水では「グループ325」という小さなボランティアグループができました。彼らは我々よそのボランティアが去った後も、ずっと仮設住宅の訪問活動をされていました。最初は「もういいよ」と言って居留守を使われたりしたこともあったようなのですが、本当に地道に、背を向けられようとも続けていて、そうすると半年経った後に「もうこの後、不安で怖いんだ」ということをポツリとおっしゃったといいます。地元のボランティアさんを通じてそうした話を聞いて、半年経ったから痛みが癒えたわけじゃないのだということ、私はむしろお伝えする係だというふうにも思っています。

よそ者が重要なのは間違いありませんし、商店街の復興では、やはりよその者が「この町の川はきれい」だとか、シャッターは閉まっていますが「建

物がきれい」といって、改めて良さを見直すって言うことはあります。しかし一番大事なのはそこに住んでいる人たちが「まだ何かしたい」という気持ちを持っている限り、それを応援するのがよそ者の役割かと思います。

商店街の支援というのはボランティア活動が一段落ついた頃に、害救援のNPOとして、仮設住宅や避難所での支援の後に何ができるかを考えた時に始まったことです。我々以外にも大学の先生、学生、いろんな人が来たために「ああしたい、こうしたい」というアイデアが湧いて出て来るようになりました。それで毎月1回、「復興サロン」という名前の場が持たれるようになりました。これは私は寄り合いだと思っています。なぜかと言うと、商店街活性化というのは地震が起こるだいぶ前から問題であった、協議会や委員会などの集まりがありました。しかしこの復興サロンは地震が起きた3月25日にちなんで毎月25日になると何処からともなく人が集まって来る。地元の人、我々は名古屋から、金沢のほうの高専の学校のとか、他の大学からも通知が無くても集まってきました。そして「あーでもない、こうでもない」という話し合いを半年、1年ぐらい続けました。そこでとても印象的だったのは、地震が起きるまで最後は「役場が何とかするべきだ」と思っていたけど、地震が起きてそれがどうにも叶わないということがよく分かったと。だから小さくてもいいから商店街で何か起こして、それを町に見てもらおうというふうに変ったということを言葉でも聞きましたし、空気でも読めた。商店街で実際やれることは小さいこと。例えば商店街っていうのはまだお年寄りが利用する率が高いです。お店の前に椅子を置いて休めるようにしようとか、みんながきれいという川をもっときれいにしようとか。本当に小さなことではあるんですけれども、こうやって小さくても自分たちでやろうという意



識が芽生えた瞬間に立ち会えたのは私も幸せを感じました。ですから、まず言いたいのはそういう地元の人たちの気持ちは忘れちゃいけないなということですよ。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。最後に平井知事から課題を少し提示していただければと思います。

○ 平井

はい、今だいたいそういう観点が出てきたかなあと思いながら伺っておりました。泉田知事のお話を聞いていて思うんですけども、今ちょっと個人情報保護の関係とそれから行政の役割や民間との関係という、そのへんで確かに難しい状況があります。鳥取県の場合は防災危機管理条例というのを作って、その中で自助・共助・公助という考え方を基本にするわけではありますが、要援護者ですね、災害時に助けなければいけない人たちの名簿作りだとか、そういう体制を組みましようということが書いてあります。今ここにきて、ようやく全市町村で名簿を作るというところまでやって来ました。その作業をする時に個別に県も相談に入ったりして進めていたんですが、やっぱり地域性があるんですね。泉田知事のところは反対の手上げ方式ということで、反対する人だけ手を上げてくれというやり方をされるとおっしゃいました。でも我々の経験からして、特に中山間地だとかになりますと、元々顔がお互い分かっているところに誰が居るか分かっていると。そういうところでは、もうある程度任意に作らせたほうがよっぽど早かったりして、行政情報だとか、何だとかいうよりも作ってしまう。また都市部のほうに行きますと、やはり行政が本来情報を共用するような形をとるのがいいんじゃないかなあという気がい

たしております。最近では民生委員の関係でも同じような問題が出ていまして。案の定、東京のほうでは「消えた高齢者問題」というのが出てきて、いないと思ったら死んでいたと。死んだはいいけど年金まで取られていたと。そんなようなことが起こる殺伐とした世の中なわけではありますが。本来、民生委員もそうですし、消防団ももちろんそうですねですけども、特別地方公務員といわれるような身分があって、守秘義務があって、自主防災会だとか、あるいは町内会でもいいと思うんですけども、そういうところにそういう公的な機能があるのであれば、そこに一定の信頼を寄せて制度を作るべきなのかなあと本当に思います。そのへんはまた泉田知事ともこれから意見交換をして制度を考えられればなあと思います。本当は国のほうで個人情報保護法のように、今回消えた高齢者問題もありましたので、要は「助け合いの世の中法」みたいなそういう法制度があったほうが現場の市町村も含めて動きやすいのかなあというように思いました。それから中山間地の災害対策ですけども、稲垣さんや松田さんのお話を聞いてつくづく思いますけれども、やっぱり町づくりと一緒に思っています。結局、普段からいろんな活動ができているところほど防災力は強くなると思います。しかも、後はそこに防災のテイストを加えていただければ世の中が回るんじゃないかなあという気がいたします。例えば境港の湊町というところでやっぱり自主防災組織があるんですけども、そういうところでは独居の高齢者の方とか、そういうところの安否を確認する訓練をやってみるとか、いろんなことを始めているわけでありまして、普段からお付き合いのある中であれば、そういうこともやり易いだろうと思います。例えば鳥取市のほうで津ノ井という辺りに若葉台という地区がありますけども、そういうところでも肝試し体験みたいな普段の町の行事から繋がりがで



きてきて、防災のほうへ入ってくるとかですね、そういうのをそれぞれの地域で工夫してやっていくべきじゃないかなあとと思います。午前中も申し上げた黒坂は1,100人もいる結構大きな地区なんです。そこで大変な地震の被害もあったわけですが、町の中の元々コミュニティー活動が盛んだったところで、そういうのが生きてきているんじゃないかなあとと思いますけど。そういうように、やっぱり町づくりとこの防災とを絡めて中山間地対策のアプローチができるんじゃないかなあとと思います。いろんなアイデアが本当はあるだろうと思います。もっと分析的にいけば都市部とか、中山間地だとか、それぞれに得意とする防災のやり方っていうのがあるように思います。例えば、町の中心部で消防団が今なかなか集まらなくなってきている。そういうところでは消防団活動だけでなく、自主防災組織のほうで町内会の延長で整備して行って、そこに常備消防がきちんと絡んでいくというようなやり方ができたり。また、中山間地のほうは若い力に頼らなくてははいけません。高齢者だけになった集落はもの凄く多いです。そういうところでやっぱり消防団の役割というのは未だに大きかったりしてしまっていて、そういうところではまた別のタイプの防災のやり方があるのかなあとと思います。そういうように地域性が凄くあると思うんです。室崎先生が午前中もおっしゃっていましたが、全国一律で物事を考えようとすると本当は無理があって、それをもっと解きほぐしてやるべきではないかということだと思います。鳥取県だから中山間地のことも考えて住宅再建の仕組みに補助金を導入したことがありましたけども、同じことを神戸で簡単にできたかというとなかなか難しかったかもしれません。それは正直な感想です。ですから、それぞれの地域にふさわしい防災だとか、支え合いのあり方を作っていくやすいシステムを国全体として整えていけば

いいんじゃないかなあとと思います。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。少しテーマが出て参りましたので、幾つかのテーマについてお互いに議論するような形で深めていただきたいと思います。1つ目は自主防災組織とか、地域コミュニティーの大切さ。まさに地域の中での人と人の繋がりをどうするかということと、それに係わって個人情報保護法というか、あるいは要援護者の安否確認のシステムをどう作るかというところを最初の討論のテーマにしてみたいと思うのですけれども。平井知事さんから地域の助け合い条例のような提案がありました。防災と個人情報の問題を避けずにリンクさせ、人命最優先の原則から個人情報を柔軟に考えていくということを提案されたように思うのですが、泉田さんいかがでしょうか。

○ 泉田

今、平井知事から提案をいただいた形で日本全体が回ってもらえると一番助かるということだと思っています。本当に都市部と中山間地は違っているということもご指摘の通りでして、新潟県も政令市新潟から人口300人ちょっとの村まで抱えていますので、それが同じわけではないということで、まさにご指摘の通りだと思っています。この普段からの町づくりという点で言うと、稲垣さんがお話いただいた通りで、私も実感しています。震災直後から震災地にはしょっちゅう入っているんですけども、段々顔が輝いていくところを感じてまして。本当に村は壊滅的なダメージを、震災で物は壊れてしまったけども、どちらかということと中山間地域は集落ごとに今まで閉じてたんですよ。よそ者は受け付けないっていう感じになっていたものが、この震災を通して助けて



もらえるようになった。自分たちの子どもや孫の世代が来てくれるようになって、生きることに張りが出たということが切々と伝わってくるということになりました。顔が輝くと同時にまさにネットワークができて、そこに人と人との繋がりができていくと。実は今、新潟県では防災グリーンツーリズム宣言というのをいたしております。これは都会から大変多くの人に助けていただいた。でも、首都直下型地震を始め大都市を襲う地震というのはいつ来ても不思議じゃないよねえと。この100万人受け入れ構想というのは、行き来をする心と心の繋がりを持った人のネットワークを作りたいということで提唱しているんですが、これは心と心の付き合いがないと何が起きるのかっていうことをちょっと説明したいと思います。私、就任した初日に、当時長野県知事は田中康夫さんでした。電話が掛かってきて、「もしもし、泉田知事さんでいらっしゃいますか。私、長野県知事の田中と申します。私、実は阪神・淡路でボランティアをやっておりまして、この度の地震でも是非お手伝いをさせていただきたいと思ひまして、大変失礼ですが知事さんにお電話をさせていただきました。」まあ、こんな感じで始まってですね。これ何を言いたいかと言いますと、実は当時、白骨温泉の入浴剤事件みたいなものもあって、どんどん被災者を何人でも無制限で長野県の予算で全部受け入れますという破格のご提案をいただきました。体育館に避難しているお年寄りはやっぱ3日も経つと体があっちこっち痛くなるわけです。そんな状況であれば、温泉に避難をしていただいでゆっくりと体を休めていただく。これ大変ありがたいお申し出だと思って、もう被災地に周知しました。「長野県が温泉地で、今、手も空いているから無制限に受け入れてくれるよ」と。「皆さんどんどん行って、この体育館の板間から避難してください」と。何人行ったと思います。ゼロ。

一人も行かなかったです。一生懸命宣伝したんですけど。結局、繋がりのないところにはやっぱり心配で行けない。どうして俺だけ行けるんだと。「じゃあ一家の大黒柱は？」って言うと、家財道具一式全部家が潰れるところにあるわけです。心配で遠くになんて離れられない。そうすると家族が別々でなんていうのは、とてもじゃないけどできない。ということになっちゃうわけなんです。ところが一週間ぐらい経つと、「千葉に行きます」、「埼玉に行きます」、「東京に行きます」、「神奈川に行きます」ってポーンと遠くにこの被災地の体育館の板間から脱出する人が出て来る。体が限界っていうことなんですけども、それプラス親戚がいる、家族がいる。こういう繋がりを持っている所は距離は関係なくて、遠くに避難するっていうことが実際起きました。こういう普段からのお付き合いがあるところには、いざっていう時に避難するっていうことはできるんですけども、なかなか初めてのところで温泉街に来てくださいと言ってもこれは上手くいかないなと。心と心の付き合いがある、そういうネットワークを普段からお付き合いで作っておく。一年に一回責任者だけでもいいと思っています。田んぼに来てもらって田植えでもいい。草取りでもいい。稲刈りをちょっと手伝うというのでもいい。まったく何にもやらないで話し相手になるだけでもいいという形で普段からお付き合いをするネットワークを作っておくっていうことは、これ「お互い様」ということになるんじゃないかと。これは町づくりとか、それから将来必ず来る食糧危機。2050年地球の人口は90億を超えます。そして、全体的に豊かになっていく中で、食糧危機は来るか来ないかという問題ではなくて必ず来るわけですから、3年後か5年後か30年後か知りませんが、その時に第二の故郷を持っているというのは都会の方にとっても心強い。そしていざっていう時の故郷で



お付き合いをしている方々が都会にいるってことは、受け入れるほうにとっても大変心強いという両面で是非こういうネットワークができていくような、これが自主防災組織単位なのか、それとも企業単位なのかもしれないということも思っています。先日、東京で事業継続活動、これをするための仕組みをどう作るかっていうシンポジウムに行ってきたんですが、9.11のテロを思い出していただきたいんですけども、あの時ワールドトレードセンタービルに本社機能を全て集中していた企業、人的被害が30%でも倒産しちゃう。一方、人的被害が50%を越えていたにも関わらず、バックアップセンターを持っていた企業は、その後一週間以内に事業を再開させるというようなことができたわけです。私も実は小学校の頃、水害に2度あいました。連続で。小学生ですから邪魔です。後片付けをするのに。そうすると近くの親戚に預けられちゃうわけです。夏休みの間中、避難していたということを経験したんですけども、企業も事業再建を首都圏でやろうということになると働き手はいるんですけども、じゃあご家族、お父さん、お母さん、高齢者の方。それからお子さんはどうするんだと。家族の面倒を見ながら事業再建というのはほとんどできないということになると、そういう方々が避難できるような第二の故郷。これは埼玉県の上田知事は首都直下型が来たら、700万人ぐらい埼玉県に来るだろうという覚悟でどう対応するかって考えられてるんですが、体育館に雑魚寝っていう訳にはたぶんいかないんだと思うんですよね。体の弱い方、サポートの要る方、学校で授業を受けなければいけない。そういう方々を受け入れる。これは遠距離でも普段からお付き合いがあればポンと飛ぶっていうのは経験則上分かっていますので、そんな関係も含めて情報とそれから地域の発展とコミュニティの維持。こういったものができたらいいん

じゃないかなというふうに思っています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。泉田さんの話は多方面に跨っているのですが、最後のほうにお話された「第二の故郷」っていうのは、3番目のテーマとして後で議論させていただくことにします。個人情報の話なり、自主防災組織や地域のコミュニティの話の中で言うと、繋がりがっていうのが一つのテーマになります。個人情報の問題っていうのも、信頼性を前提とした情報共有の問題として捉える必要があります。信頼できない人に情報を渡すから、個人情報に関するトラブルが起きるのです。つまり、地域の信頼感とか、繋がりがとか、そういうベースがしっかりできているところであれば、個人情報の問題っていうのは起きないと思うのです。だから個人情報の問題は、それをしっかり防災に活かしていくためには、個人情報の持っている形式的な少し硬い縛りみたいなものを取り外すことも必要だけど、同時に人の繋がりが、コミュニティの信頼感を育てていくことが必要です。中山間地にはまだ生き続けている信頼感があるので、場合によっては中山間地域には個人情報保護なんか有り得ないのかも分からない。このことはひょっとしたら都会にこそ必要な話です。都会でもきちっとした信頼関係を作らないといけない。繋がりと個人情報保護っていうのは裏表の関係のように思うのです。この個人情報とか、地域コミュニティの繋がりがっていうことで稲垣さんか、松田さん、何かご意見がございませうでしょうか。

○ 稲垣

繋がりの話でございませうね。いや、本当に。いわゆる地域内の繋がりがっていうのは中山間地は「あるよ、あるよ」と言われてはいるんですけど、



確かにあるんですけども。どちらかと言うと後ろ向きの繋がりみたいなのもあって、「そんなのやめとこうよ」とか、「そんなの、えー我々やるのー」みたいな、どちらかと言うとさっきの諦め感に通じている、何て言うのかな、そういう繋がりっていうのも実はある。やっぱりそうじゃなくて、我々良いことをみんなと一緒にやっていこうじゃないかっていう地域内の繋がりを活性化するにも実は外の繋がりが一番大事で。

○ 室崎

外の繋がりの話は、次にしようと思っていたのですが。

○ 稲垣

そうですね。そんなような感じがするんですね。だから中の硬直した繋がりを外の異分子が入って来るだけで関係性が変わってくる。これが凄く大事なんだろうなあというふうに思っています。だから非常に硬直した保守的な、閉鎖的な、ある意味依存的な繋がり感ではなくて、開放的で、主体的で、そういうような繋がりを変えていく。それも外の繋がりの刺激が実はその関係性を変えていくというふうに思っています。それは凄く大事なんじゃないかなあと思っているんですね。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。大きな災害を受けた時にみんなの命をどう救うかってことが大前提で、そのためにしがらみになっている個人情報の壁をどう破るかが課題で、そのためには地域コミュニティとの繋がりが必要だということです。しかし稲垣さんは、その繋がりっていうのも後ろ向きの繋がりでは駄目だと、言われています。やっぱり前向きの繋がりを作らないといけない。その前向きの繋がりをどう作るかってい

うことでは、稲垣さんがおっしゃったように外からの支援者、外からのよそ者の力が必要です。しかし、外の力をうまく受け入れるには、内と外とで地域の良さを共有することが欠かせません。だから、地域の目標みたいなもの、ビジョンみたいなものを地域がしっかり持って、同じ共通の目標でみんなが力を合わせるという関係性ができた時に、本当の意味での繋がりができる。たぶんそういうことを言われているのだと思います。それは松田さんが先ほど言われた、商店街が将来方向を見続けていくようなところと関係する。地域をどうしていくかっていうようなものと、人の繋がりは関係するように思うのですが、松田さんそういう繋がりとかについていかがでしょうか。

○ 松田

先ほど中山間地と都市部では違うのではないかというお話で、概ねでは賛成ですけれども、穴水は田舎ですけど、でも都市化しているんですよ、やっぱり。小さなところでも、中山間地でも小都市化していると言いますか、考え方がとつても都会っぽくなっているように思いました。どんなに田舎でも「個人情報」の話が出てきますし、みんなお互いの顔を知っているじゃないって思うけど、誰かがやっぱり「個人情報が」っておっしゃるんですね。だからあまり中山間地だからどうだというわけでもなく、日本全国小都市化している気がします。特に、災害時要援護者の話をすると必ず個人情報についての質問を挙げる方がいます。制度の改正は待つとしても、私たちはいつも個人情報の問題に対してはそれでも「そのご本人の了解さえ得れば、この問題はクリアできる」というふうにお答えするようにしています。ですから、本当に地道な方法ではあるけれども、どうして私の寝ている場所をみんなに知ってもらわなきゃいけないのかということを経験地の



事例を出しながら説得する。そういう役を自主防の会長さんにやってもらったりしています。理屈が飲めれば、それでも「嫌だ」という人はそんなにいないので、やっぱりどうしてそうやって周りに知ってもらう事も大事ではないかと思えます。その意味では防災というのは一つのきっかけに成り得て、これはまた別の事例なんですけれども、マンションの自主防災活動の活性化というお仕事をした時に、名簿もない中で、私たちもいろんな人と協力をしながら一年間防災訓練をやったりとか、その地域に元から住む古い町民の方とマンションの住民の交流という事を一年間かけてやったんですけれども、そしたら火がついたのがそのマンションに住むお母さんたちでした。その一年間の防災の活動を通じて、地震が来た時にも子どもだけだったら、私たちの誰も周りの電話番号もメールアドレスも知らないっていうのは本当に怖いと気づき始めて、お母さんたちが数人で、まず同意を得た人の中から名簿を作り上げるという事を始めました。それは子どものためですよ。思いがあれば個人情報保護の法律も何も関係ないんだという事を実感しまして、その何かの時のために、地震が来た時のために、せめて電話番号ぐらいは交換しておきましょうということで、防災の活動というのはそうやって地域の繋がりを作る一つのきっかけになる。お母さんたちは、その後サークルのようなものを立ち上げられて、最初は防災の話をしてたんですけれども、そのうちやっぱり子育ての悩みになって、幼稚園はどこに入れるって話になって、どんどん話題が広がって、それはそれでお母さんたちにとっては場ができたっていうことになるんだと思うんですけれども。防災っていうのはそこで終わらなくて、冒頭の自己紹介でも申しあげましたが、やっぱりその危機感に目覚めた人たちが、どんどんその地域に自主的に繋がりを作っていききっかけになる

ものだというふうに私は思っています。

○ 室崎

はい、ちょっと泉田さんから松田さんに質問があるそうですから。

○ 泉田

松田さん、ちょっと教えていただきたいんですけど。自主防災組織が、自分たちで災害時要援護者名簿を作るのは OK なんです。本人の了解を取れているんで。また、災害時要援護者名簿は、実は行政は持っているんです。実はその名簿を自主防災組織に渡せば、すぐに 100%の自主防災組織で名簿を持っていることになるんですけども、そこに凄い抵抗感があって自主防災組織が名簿を作れないと。行政が自主防災組織に名簿を提供するのは○ですかね、×ですかね。

○ 室崎

松田さん、いかがでしょうか。

○ 松田

それができれば問題ない。早いと思います。だけれど、私たちがあえて住民の人にたちやってもらっているというのは、まず今はなかなかクリアできない。行政から渡してもらえないという壁をクリアするのが一つと、よく言うのは名簿作りがゴールじゃないっていうことはよく言っているんです。名簿ができたところで、救えないと。やっぱりその中で先ほどから出ているように顔が分かって、そしていざという時は「この人を助けに行かなきゃ」とか「あのおばあちゃんは どうしてるかな」という気になるっていう人の関係を作るっていうことのほうが大事というか最終目的ですので、そうすると名簿を一生懸命作る過程というのも割りと大事だったりするのかなあと思いま



すね。でもそのために出さないというのもちよっとおかしな話ですので、どうなんでしょうね。名簿を作ることが目的ではないという事はやっぱり皆さんに理解してもらいながら進めなきゃいけないのかなあというふうに思いますけれども。

○ 室崎

これは、地域によって住宅再建なんかの支援方法も違うっていう話とよく似ています。自主防災組織の実情において名簿を渡したほうがいい場合と渡さないほうがいい場合とあるのです。大学では、学生たちはすぐ「その文献はどこにあるのですか」って聴きに來るのです。その時に「文献を探すのはお前の仕事だろう」って突き返す場合と、「いや、ここの図書館にあるからこれを読みなさい」という場合と、学生によって使い分けるのです。地域の自主防災組織がどう力をつけていくかということと、学生どう力をつけていくかということは同じだと思います。ケースバイケースなのです。だから機械的に建前制度を盾に取って出しませんというのは間違っていると思いますけど。じゃあ何でもかんでも渡せばいいのかっていうと、そういうわけでもないように思いますし。今始まっているのは、一人一人に合意をとるために行政が町内会に名簿を提供し、町内会は名簿を持って合意を取ってくる。そのために名簿を渡すというのは、僕は凄くいいことだと。大都会なんかは、要援護者がどこにいるのかも分からない。自分たちでやるのはとても大変なことだけ。「ここにこういう方がおられます。じゃあこの名簿でそれぞれの方に了解を取って来てください」と。「了解を取った方についてだけ、その後最終的には町内会の名簿に載せてください」というのは有り得るかもしれない。名簿作りは全国の自治体が非常に困っておられる話です。その時に、優先するのはやっぱり人の命が最優先するんだって

うことは忘れてはいけません。ということで、よろしいでしょうか。非常に重要な問題で。松田さん、もう一度私の解答が間違っていましたかね。松田さん、よろしくお願いします。

○ 松田

特に大都市の場合に感じたんですが、いくら名簿ができて、それだけでは救えない人たちが必ずいるということですね。例えば2008年の8月末に愛知県で豪雨があつて名古屋でも被災をしました。私たちはボランティアとして地域に入り、まずは町内会長さんにご挨拶をして、「どこか困っているお宅はありませんか」「片付け必要なお宅はありませんか」と聴きました。大概のところは「うちの町内会の片づけは終わっています」とおっしゃるんですけども、一人ある大家さんが、「うちの店子で一人気になる方がいる。ピンポンを押しても出て来ないから見に行って欲しい」と言われある家を訪ねました。この方は男性の一人暮らしで、一週間濡れた畳の上で暮らしていた。50代の若い方ですが、地域との繋がりが全くない方ですね。町内会とは縁がなく、普段はきちんと生活ができていたんですけども、濡れた畳の上で生活をされていたというケースを目の当たりにして、自主防災会だけでは救えない人もいると実感しました。そういう家に対しては、ボランティアのようにちょっと距離の離れた人があえて「やりますよ」と言って、地域に入ったほうが入りやすいというケースもあると学びましたので、それも1つ加えておいていただきたいと思っています。

○ 室崎

はい、ありがとうございました。じゃあ、ちょうど良かったです。2番目のテーマ。そのよそ者の果たす役割ってというか、外からの支援というの

はどう考えたらいいのかっていうことですよ。特に中山間地というのは、非常に今、力・体力が落ちている。だからこそやっぱり外からの支援が必要だと。支援は、お金も人もだと思っただけです。その中で若者とか、よそ者の果たす役割みたいなところが先ほどからだいぶお話が出ているので、それについてまた少し意見交換をしてみたらと思うのですが。平井知事、鳥取西部でも最初はたくさんボランティアが来られて、少々最初は困られたんじゃないかと思いますが。外の力、支援というのをどういうふうにお考えになっているか。よろしく願いいたします。

○ 平井

ボランティアがこの日本で活躍し始めたのは、まさに災害からだとは私は理解しています。即ち阪神・淡路大震災。平成7年1月17日でありますけれども。あの時にテレビの画像なんかで見まして、「こりゃあ助けに行かなきゃあいけない」ということで、それまでボランティアと言うと何か別に思想的にどうかということではないとは思いますが、ちょっと自分たちとは違う人っていう意識が日本人にはどこかあったんですけども。「みんな助けに行っているらしいな」と。「何か食べ物がないらしいな」とか「服がないらしいな」と。それで、あれでたぶん市民権を得たんだと思うんです。あの頃にNPO法人なんかたくさん出て来て、おそらくボランティア革命と言っていいような革命が起こったと思うんですね。あの頃にスタートして、まだ15年ぐらいということになりますから、そんなにボランティアだとか、そういう外から入って来た人とその中の人たちとの交通整理がまだあんまり得意じゃあないと思います。日本人はね。ですから、前の西部地震の時もそうありますけれども、ボランティアがたくさん来られて、それで集中して来られた後、交通整理をす

る時にやっぱりなかなか現場のほうでは苦労もあったというのが実態であります。でも段々慣れてきますし、その内にボランティアの皆さんが自分たちでまた自主的に動き出すわけです。日野町のボランティアネットワークではその後も活動を続けられて、鳥取県のほうの災害の情報センター機能も持ってもっている関係もありまして、いろんなボランティア活動に今、参画されています。例えばお年より対策とか、あるいは農業への援農隊に絡んでくるとか、いろんなことをされておられまして、大変に活発に動いていると思います。そこで、少しさっきも泉田知事がおっしゃいましたけども、開放的になるという面は確かにあったと思いますね。地震を通して外の世界ともう一度交わる機会を得たというのがあると思います。あの頃ちっちゃい子どもたちだった子等の話を聞きますと、ボランティアの皆さんと遊んだ思い出って結構あるんですよ。とっても優しいお兄ちゃんお姉ちゃんたちがいて、何か知らんけどあの頃はいっぱい居て遊んでくれたと。そういうことで人の優しさっていうんですか。コミュニティーで失われかけていたものが、外から来た人の力で生まれたというのはあると思います。ただ、やっぱり何らかの交通整理も必要で、このへんはもっともっと上手くならなければいけないこともあるんじゃないかなあと思います。ボランティアでブルーシートを張っていただいていたら、そのうち屋根を直す業者だったとかですね。結構ある話でありまして。そういうところがやっぱりいろんなお付き合いの仕方っていうのはもっと上手にならないといけないかなというふうに思います。その時に我々のほうに助けに来てくれた神戸の人たちがおられたわけでありまして、それは神戸市の大木というところの皆さんです。阪神・淡路大震災で大変に被害がありました。その時に、ちょうどこの水がそうなんですけれども、江府町という大

山の麓の奥大山の町がありまして、これは同じ町で今サントリーさんが天然水を採取しています。あの町なんですけども、ここが水をたくさん持って行ったんですね。大木のほうに。ボランティアとして。そうしたらお返しをしたいと言って、今度はこっちが困った時にやって来たわけです。さっき泉田さんも言われていましたけど、いきなり繋がるという事でもなくて、元々こういうようないろんな体験を通して絆を深めていって、外との交わりが出てきてくるといいのかなあとというように思います。よそ者という視点がないと町が変わるきっかけがないということもありますので、今日、こうしていらしゃっている松田さんのような存在というのは、その地域で本当に貴重な存在だろうと思います。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。稲垣さんは、先ほども確信を持ってその地域が誇りを取り戻す上では、よそ者の力は凄く大きいって言われています。中越ではいろんなところでいろんな動きが出てきているんですけど、何か具体例がありますか。よそ者の果たした役割という事で何かご意見ありますでしょうか。

○ 稲垣

そうですね。新潟も本当は外を受け入れることに慣れていなかったのです。ただ、要は外と繋がることに慣れていなかっただけの話で、数をこなせば慣れると思うんですね。逆に今の新潟は、図に乗ってるところもあるんですけども。面白いのは、例えば繋がりとしてはさっきの防災グリーンツーリズムの知事のお話で、川口の荒谷地区っていう12世帯の集落なんですけれども、元々震災前は25ぐらいあったんですけども。その集落が震災後、が「これじゃ駄目だ」ということで、外

の力を借りながら自分たちでビジョンを作って、そのビジョンが「本気で付き合える仲間作り」というのを挙げたわけですね。いわゆる、「いろんな方と付き合いなくてもいいんだ」と。「顔の見えるお互い第二の親戚関係で外の人と繋がっていきたいんだ」ということをおっしゃっていて。相手がどこかという東京都墨田区の京島というところ。防災に非常に熱心に取り組んでいるところなんですけども。この地域とお付き合いをしているというところまでございまして。春は田植え、夏は蛸狩りツアー、秋はきのこ狩り、冬は雪体験ツアーということで、墨田の防災の方がその田舎体験をしていますし、川口の方は春秋夏冬と墨田で開催される物産展に行って様々な物産を売ってくるという話でございまして。そんなようなことが起きています。ですから、とにかく僕は一番大事なのは地域を外に開いておくこと。そこで、いろんな繋がりが継続してある。あるいは、いろんなその繋がりがあるという事が実は中山間地を疲弊させないし、後ろ向きにさせないし。地域さえ開いておけば大丈夫だというふうに思っているという事でございましてね。それから、実は中山間地が変わっていただけじゃなくて、来ている都会の方も変わっていくわけですね。「ああ、ここに来てよかった」というところもありますし、特に学生さんなんかは、今、就職も厳しい。自分って社会の中でどんな役割があるんだろうとか、あるいは社会に必要とされているのか、ぐらいのことを思っている大学生さんなんかもうらっしゃるわけですね。だけれども、そういう中山間地に来る中でおじいさんと一緒に畑を打つような体験をしていく中で「ああ、違う人生もあるのかなあ」とか、あるいは自分だって社会の中で立ち位置があるんだとか、役割ってあるんだなあということで。実は中山間地の方が誇りを取り戻すのもそうなんだけれども、都会の方も誇りを取り戻

しているという事があるんだろうという意味でも、やっぱりこの繋がりというのが非常に大事なんだろうなあというふうに思っているということです。事例ということで防災グリーンツーリズムの話をしましたけど、これも4年の付き合いになってますね。これ4年付き合うともう逃げない。ごめんなさい。お客さんじゃないですけど、逃げないなあと思っています。以上です。

○ 室崎

はい、泉田さんよろしくお願いします。

○ 泉田

ボランティアと行政という観点で痛切に感じていることがあるのでご紹介させていただきたいと思うんですけども。私、一番最初にボランティア活動と出会ったのは、実は阪神・淡路の前、ナホトカ号が座礁して油が流れ着いた時。ちょうど私、資源エネルギー庁の石油部で補佐をやっていたものですから所管していたんですけども、その時にやはり全国から油を回収するのに集まっていたと。これは人手が多ければ多いほど良いというふうに思いがちなんですけども、そうじゃないんですよ。どうフォーメーションを組んでどういうふうに割り当てるか、コーディネーターがいないと人手が十分に回らないというところが問題で。これはさっき平井知事が言われた通りなんですけども、必要としている仕事とそれから本当に人手が足りているのかという事がちゃんと把握できないケースがあるというところは、これは大きな問題だと思っています。どういうことかと言いますと、災害対策本部をやっていますと、私ナホトカ号の経験があったので、最初の段階から実は福井のボランティアの代表の理事長さんに私のカウンターパートになってもらって、代表に災害対策本部に入ってもらいました。直接やり取りし

ているんですけども、現場からはもう人手は十分ですっていう話が上がって来んです。じゃあ本当に大丈夫なのかどうなのか避難所に行って話を聴いてみると、「お母さん、もう大丈夫ですか」「お父さん大丈夫ですか」で聴くと、「やあ、もう家の中は減茶苦茶でどうしようもないし、助けてくれる人もないから仕様が無くてここに居ます」という話になっていて、災害対策本部に上がって来る「もう人手は十分です」っていう話と現場のほうのニーズが大きく乖離をしているという状況というのが間々ありました。特に県と違って、直接住民と向き合うのが市町村ということになりますので、この市町村長とボランティアの関係が上手くいくかどうかというのは極めて重要だと思っています。いろんな市町村を眺めていて、上手くボランティアとやり取りできた首長さん、もう住民から高く評価されて、村長か町長か市長か言い難いんですけど。「一生懸命やってくれて、ありがとう」と言って国会議員にまでなった首長もいれば、一方で「これは酷いじゃないか」と。「何で隣町やってくれるのに、うちはやってくれないんだ」ということで立候補もできなかった首長もいて、まったく市町村の対応によって雲泥の差が生じると。これで重要なのは何かというと、ボランティアはやりたいと思っていっぱい人が来てくださるんですけど、それを上手く配分と言うか、役割分担をすることのできる機能を行政と一緒にできるかどうか。これ、首長の意識が大変重要でして、ボランティアは行政の下請けだと勘違いする人がいるんですよ。「行政が足りないところを行政の指示に従って動け」というふうにやっても動かない。ボランティアっていうのは、頼まれんでもやるけども命令したって動かない。そういう人たちなんだっていう理解が行政側がないと全然上手く回らないっていうことだと思っています。新潟県では、このボランティアコーディネーター

ができる人を育成するために中越防災安全推進機構という社団法人を作りまして、ここで防災士の育成をしています。すぐ近くの人防災をやるのと、それからやはりコーディネートをやる能力を持っているかどうか。これが重要だと思っています。これは行政側の意識も大変重要なんですけども、大きな災害になると全国から義援物資が送られて来て、今はなるべくそういうのは断って、「募金をお願いします」と言っているんですが、それでもやっぱり来ちゃうと。そうすると行政なんて素人ですから、どの物資をどこに届けていいかっていうのは全然コーディネートできないです。誰ができるかって言うと運送会社だとか、それから倉庫会社から派遣されて来たボランティア。こういう方々はあるんですけども、彼らが仕切ろうとすると怒り出す人がいると、行政で。「何で行政を差し置いて勝手にやるんだ。だまっとれ」ということになる、手を出したいんだけどじっと見て「やり方悪いよね」というのを眺めているという話も聞きました。やはり行政の首長、特に市町村長さんが、「いざっていう時にボランティアコーディネーターができる人のカウンターパートを持っていますか」というところが極めて重要なんじゃないかなあというのは体験から感じています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。よそ者が被災地の中に入って大きな役割を果たすためにどういうことが必要か。一つ今のお話は行政とボランティアの関係性なり、その中でもコーディネーションを行う人がきちっといえないといけないという話です。その他に、松田さんがチラッと書いていた話があります。ボランティアが行っても「うちは大丈夫。間に合っています」という地域がたくさんある、ということです。これは新潟の場合

もそうです。新潟の人って凄く奥ゆかしくて、もう家の中はひっくり返っていても「大丈夫です、大丈夫です」と言っていて、ボランティアがなかなか入れなかった。そこをどうやってこじ開けないですけど。そうするとこれはボランティアとまた被災者との関係みたいなのをどう作っていかってという問題に帰着する。そういう良好な人間関係なり信頼関係をどういうふうに作り上げていっていかってということですが、松田さんはいろいろ体験されているので、そのあたり何かありましたら。

○ 松田

はい、そうですね。まず一つは先ほど平井知事さんがおっしゃっていたように、まだ15年、だから模索していることのほうが多いと思います。一つ宣伝をさせてもらっていいでしょうか。私たち、「震災がつなぐボランティアネットワーク」というネットワーク組織を作っています、神戸の時から繋がっている災害ボランティアの仲間たちがいます。阪神・淡路大震災から15年を期に『災害ボランティア文化』という冊子を作りました。これは室崎先生にもご執筆をいただいているんですけども、神戸で目覚めた若者と、それから私も含め神戸以後に災害ボランティアの世界に飛び込んだ人たちと、もっと先達の世代が、何をボランティアの文化として次の世代に繋げていくかという事を残した本です。私は被災地に行く時にはこれをバイブルとして持ち歩いているんです。まだ文化としては未成熟だから、交通整理にも慣れていないし、ボランティアが大勢来たらびっくりするし、行政の方もまだ慣れていなくて、やはりこれはじっくり助け合える文化というものを育てていかなければいけないなあというふうに考えています。一つは、神戸の時は本当に無秩序で、とにかく被災地に飛び込んで目の前にいる人を助けたというところから始まりました。それが



ら、やはり交通整理の仕組みが必要だということで、ボランティアコーディネーターの仕組みはもう日本全国津々浦々できてきましたし、それから今は大きな災害が起こると必ず災害ボランティアセンターができて、これは一つの成長だと思います。ただし、その仕組みだけが先行している現場も今は逆に問題になっていて、ボランティアというのは本来は「目の前にいる人を助けたい」という思いを持って来るはずなのに、行ってみたらセンターの仕切りだけで仕事が終わってしまったとか、それから行ってみたら「仕事がない」と言われて怒って帰ってきたとか。そういう事例もよく聞くということになってきました。だから、一つは大勢のボランティアさんが全国から駆け付けてきて、その人たちにどういうふうに、多くの人が集まって来てその力を活かす仕組みを行政も含めみんなで勉強し、学んでいく。一方で、例えば、足湯隊のボランティアの人たちは学生さんを中心にした活動なんですけれども、目の前にいるたった一人の被災された方の話を聞くことを徹底してやり続けているんですね。聞くだけじゃなくて、「つぶやき」と彼らは呼んでいるんですけども、それをまとめて、じゃあ次の支援策は何かということの場合によっては行政に提案をしたり、それから自分たちでプログラム化したりということをしている。こういう活動を見ると、その仕組み化の一方でやっぱり目の前の一人の人を助けたいということを大切に、そういうボランティア活動でないといけないなあというふうにも思います。この両極の、「仕組みと一人」というところをどうやって合間を取って文化として成熟させるかというのがとっても難しいですけども、私はそこに今、魅力を感じてこの仕事をしていると思っています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。稲垣さんの先ほどの話の中で、要するによそ者が来るとその被災地の人たちも元気になる。だけどよそ者も元気になるっていう話をしていましたよね。それはひょっとしたら、被災した地域の人たちが若者をそこで育てているような力が凄く働いているように思うのですよ。だから、むしろ若者もそこに入ることによって凄く勉強して大きく育ていく。相互にプラスになる関係性が成り立っているということですよ。

○ 稲垣

おっしゃる通りでございまして。先ほどちょっと地域復興支援員の話をしましたけども、実はこれはコーディネーター役でもあるし、よそ者役でもあるんですね。もう地震は来てほしくないんですけど。今、中越の同じ被災地で地震があったらボランティアどんどん受け入れると思いますね。たぶん。どんだんうちの地域に来てくれて取り合いになるような気がしていて、そこまで変わってしまったかなあということなんです。優秀な地域復興支援員ってどんな支援員か分かりますか。地域の人から支援されるような支援員。ほっとけない、頼れない。「あいつ、駄目だなあ。あいつ、俺らがしっかりしないと」「あいつ、地域復興支援員なんて言っているけど、役場から怒られるんじゃないか」というふうに心配させる支援員が一番優秀ですね。だからお互いに変わっていく。僕が思うのは、助けられるよりも助けるほうが元気になりますから。ただ、今中山間地は助ける相手がないし、おじいちゃんおばちゃんも助ける相手がないから元気がないわけで、助ける相手を逆に作ったほうがいいっていうところが大事なんというふうに思っているんですけどね。



○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。今、お話にあった地域復興支援員っていうのは泉田知事さんが制度化されたのですが、大学を出たての若者がポッと地域の中に入って、町内会のミニコミ誌を作ったり、盆踊りの段取りをしたりとか、そういうことを一生懸命やるんですね。だから、あんまり能力があって全部やってしまう人はかえって嫌われて、何もできない人が入ってきた方がみんなが手伝ってくれるというようなお話だったと思うのですが。そういう中で若い大学生が中山間地域の中に入って行ってみんなでいろんな作業をするという関係ができて。昨日聞いたら鳥取大学の学生も日野に2人ほど入っているという話を聞きました。だから、そういう若い力をどうやって地域の中に取り入れるか。地域で育てていただくとその若者が今度は地域の担い手になるという関係があるということかもしれません。まさに平井さんなんかも。

○ 平井

私どもではNPO法人なんですけども、学生人材バンクというのがありまして。これ、この間、農林省ですかね、大賞を取ったんですが。援農隊みたいな事をやるわけでありまして。そして出掛けに行って、そこの地域の農作業だとかをやりましょうと。そういうような活動がだんだん定着してきましたね。そのリーダーの人はついでに嫁さんまでもらっておられますけども。そういうことで、大変定着してきていると。また確かに最近1ターンだとかリターン。特に1ターンのものが凄く増えてきたと思います。日野の話もそういうことで、福岡から来られた人が農地を探していたら日野が一番条件的に合ったということで、高田さんという方とかですね。そうやって若い人が本当に入ってくるようになりました。鳥取県も去年

はIUターンなんかも考えて、就農支援事業みたいなサポート事業をやったんです。国以上のことをやろうということで、我々はたぶん全国でも一番良いかもしれないですけども、月々13万円ぐらい出そうと。新規就農者に。それを農業法人に雇ってもらうような形で入れようということやったら、年間300人~400人ぐらい来るんです。その中のスーパーバージョンを作りまして、県の農業開発公社で研修をするっていうのを15人枠で募集をしたんですね。夏に募集をしたら30数名来まして、そこから試験をすると。冬の募集ですと、春から始まるやつが15人に対して50人以上来たんですね。今、試験をして農業をやる時代になっているんです。それで受かった人は、15人の内の13人はよそ者です。県外から来ました。そのうちの2人は大学院卒ですから、やっぱり時代は変わってきているんです。大学院ぐらい出ないと農業できないと。まあそういうように今変わってきていますね。だいぶ若い力がしっかりとそうした集落の中に入り込んできているというような状況じゃないかと思います。それでさっきの足湯の話聞いていて、災害対策の一つで大事かなあとつくづく思うのはPTSD対策ですね。子どもたちもそうであります。例えば、学校でもスクールカウンセラーをだいで送り込んで、当ても調査をさりげなくやる。それから避難所に例えば婦人警官。そういうスキルを持った人が行くとか。勿論プロのそういうカウンセラーなんかも行ってやっているわけでありまして。今のその足湯ボランティアというのは凄く自然な形で、その地域の避難所で大変な思いをしている人たちにとってその状況を聴くいい機会になるかもしれませんね。かなりの多くの人たちがいろんな悩みを抱え込みます。そのことは避難所対策、最初に泉田さんがおっしゃいましたけども、非常に重要なとこだと思います。特に中山間地で秋から冬が厳

しいと泉田知事がおっしゃいましたけども、我々のところもそうだったですね。10月の6日です。あんまり寒くないだろうと思っていましたね。最初、避難所から電話が掛かって来まして、「ストーブをくれ」と言うんです。余震がどんどん続いているわけですよ。ポケットベルが鳴りっぱなしなんです。余震のおかげで。震度4以上全部鳴るもんですから、それが1個地震があると3回か4回か鳴るんですね。ピーピカ、ピーピカ鳴りっぱなしで。こんなところでストーブ出したらまずいんじゃないかという。最初はホッカイロを探したんですね。この界隈のホッカイロを売っているところ、薬局からスーパーマーケットから全部電話しまして、県庁で買い占めたんですけども。それで避難所に送り込んだと。でも「やっぱり寒い」と。そりゃそうですよね。それで夜中遅くなってから、人間関係ができていたからだと思いますが、自衛隊のほうにお願いをして、「自衛隊の駐屯所に30個ぐらいストーブがあるから、それを持って行きます」と。「何なら油も付けましょうか」と言ってもらったので、「油も付けて、じゃあ持って行ってください」と。そういうことやったんですけど。本当にその避難所生活、炊き出しから何から大変ですし生活が激変しますので、そういう心のケアのことなんかをいろいろとボランティアの方とコラボレーションでやっていったら、もっと効率が良くなったりするんじゃないかなあと思いました。それは従来の行政で持っているツール、心理カウンセラーとか、婦人警官だとか、そういうところ以外のツールとして大事だと思います。ボランティアの皆さんが段々日常化してきたら、我々もうちょっと賢くなっていいかなあと思うのは、震災を幾つかここ数年で体験していますので、最初の初動でこういう仕事の塊がありますというパッケージがありますよね。そういうもののパターン化ができてき得るん

だと思うんです。我々は、いっぺん経験してますから「まず最初はこっちに行ってください」と。「ここが大変でしょうから、あそこたぶん壊れてるはずですから行ってくださいな」と、こうなるんですけども。そういうのを全国でもボランティアセンターの賢い受け入れ方、共通マニュアルみたいなものを考えていっても良いのかなあと思っていますね。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。2番目のテーマも一応ある程度答えが見えてきた。あっ、泉田さん、ひと言お願いします。

○ 泉田

今、平井知事のお話を聞かせていただいて、確かにボランティアは時系列によって、必要な内容が大幅に変わってきます。稲垣さんのお話と松田さんのお話、発災直後と中長期的な復興の話でだいぶイメージ違うという事をお聞きいただけたと思うんですけども、そういった中でマニュアルを作っていくっていうのは、やっぱり考えていかないといかんのかなあとというのは、今日は宿題として私持って帰りたいと思っています。その時に一つこういう話がありましたので、ご紹介をしておきたいと思います。ボランティアで特に発災直後って危険が伴う部分があるってということなんです。鳥取でもそうだったと思いますけども、特に6年前の中越地震は余震が続きました。いつまでもいつまでも。つまりボランティア活動をしている途中に怪我をされる可能性がある。どこまでが危険でなくてボランティアで許されるのか。どこまでが消防とか、自衛隊とか、プロがやるのかというところの仕切りというのは、結構難しい部分があります。さらに個人差もありまして、ボランティアで来ていただいた方がきのこ工場の後片づ

けに携われたんです。そうしたら、その方は、大量の粉塵等を吸引したことによる肺炎で亡くなってしまったというケースもありました。ボランティアで来て命を落とされるケースというのも実際あるので、これは健康診断をして仕事を振り分けるのかとか、それからやっぱり危ないところは近寄らないことにしよう。先ほど「社協で組織化段々されてきています」というお話がありました。組織化すればするほど「危ないというところは全部やめよう」という事になりますので、被災者のニーズと段々乖離が大きくなっていくという部分と、もともとボランティアとして参加をしたい、困っている人を助けたいという人の思いの乖離というところを調整をしていくためにガイドラインかマニュアルがやっぱり要るのかなあというのを今日は強く思いました。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。一番最後に出たボランティアの危機管理の問題、国のほうでもきちんと検討を始めていまして、研究会ができてマニュアルが整備されつつあるんですけど、非常に大きな問題ですよ。ボランティアのほうも命最優先なので、危険というものを軽く見ではいけない。じゃあちょっと最後、もう一つだけ議論をして終わりたいと思いますので。これは先ほど第二の故郷という言葉も出ましたし、それから中山間地のいいところを伸ばしていこうというような話もありました。防災に直接係わる場合もあるし係わらない場合もあるのだけど、最終的には中山間地の魅力をもっと売り出して、やっぱり都会の人がどんどん中山間地に来てもらえるような環境づくりをするというのも大切です。ひょっとしたらこれは究極の防災かもしれないように思うんですよね。中山間地のいい所、魅力をどう売り出すのかというところの話を最後にいただけれ

ばと思うんですけども。松田さんが穴水に惹かれて何か第二の故郷だと言っていましたので。松田さん、穴水の良さも含めてどう考えたらいいのか教えていただければと思うのですが。

○ 松田

はい。私は冒頭に申し上げた通り、生粋の都会人でしたが、地震をきっかけに被災地に入って、そのまま穴水が第二の故郷になりつつあるというような、個人的には思いがあります。「魅力は何ですか」とよく聞かれるんですけども、私が惚れているのはやっぱり人なんですよ。本当にみんな魅力的な人たちが多くて、しかも一人一人が漫画に描けるぐらいキャラクターがある感じがしているんです。名古屋に戻ると、同じ仮面を被ったような人がいっぱい歩いている。でも穴水に行くと、酒屋の何さんがいて、文房具屋の何さんがいて、役場の何さんがいて、その中に私も混ぜてもらっているということで、「とっても人が生きてるなあ」と、都会の目から見て多少理想化されたところもあるにせよ、何かそんなところが魅力だと思って、だから忘れられないんだと思っています。でも、人が魅力と考えるためには観光気分ですら1回行くだけではそこまでには至らないで、一ヶ月に1回来なくてもいい寄り合いに名古屋から5時間かけて出て行って、そこに座っていたという事を重ねてきた賜物なのかなあというふうにも思います。私は仕事上こういう変わったことができますが、この魅力を多くの人に分かってもらうにはどうしたらいいんだろうとずーっと考えてきました。その答えはやっぱり被災地なんですよ。災害があるとやっぱり助けたいという気持ちで多くの人々の心が動く。だから次に何かあった時には私はできるだけ多くの若い人なり都会の人を引っ張って被災地に行きたいです。そこで出会いと交流があればいい。実際に私たち名古屋のボラ

ンティアの中には、新潟県の刈羽村のファンになった方もいて、その方々は私たちの団体で今度は刈羽の方を名古屋に呼んで防災対策を聞くってというようなこともやっていたし、また新潟の別の集落のファンになった人もいるし、佐用町のファンになっている人もいます。「なぜ？」って聞くとやっぱり何々さんに会いたいからっていうふうに皆様おっしゃるので、人の顔までつなげられるような被災地支援を目指していきたいなあというふうに思っています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。一番最初に平井知事さんが大山の話をして、鳥取がいかに素晴らしいかという話をされました。平井さんは元々鳥取の方ではないのでしょうか。ちょっと失礼なことを。大山の持っている良さってというのはやっぱり中にいる人と外の人と感じが違うようにも思うんですけども、そういう目で言うとむしろ少し距離を置いて鳥取を見ると鳥取の良さが凄く見えてきて、これからの県政の政策の中で観光だとか、こういうものを乗り出していこうというビジョンが出てくるんだと思うんですけど。少し知事さんとして、鳥取の良さをどう売り出すかというあたりのご意見があれば教えていただければと思います。

○ 平井

やっぱり今の松田さんのお話にもありましたように、一番いいところはですね、この防災対策も含めて考えれば顔が見えるネットワークがあることだと思います。今日集まっている、穴水にしる、新潟にしる、どこもそうだと思いますけども、都会ではなくなりかけているものがある。例えば、一つの地域の中にお医者さんもいれば、大学の先生がいたり、農業を一生懸命やっている方

もおられたり、サラリーマンもいたり、学校の先生もいたたり。そういういろんな人たちが混在しているんですけど、みんなお互いに知り合い。そしていざっていう時に一緒に動けるっていうことです。これが何より鳥取のいいところではないかというふうに思っています。だから防災も含めて、鳥取力という事を私は主張してるんですけども、顔が見えるネットワークを活かして、東京や大阪には負けない地域作り、紐帯を固める、そういうことができるんじゃないかなあというふうに思います。災害を通してつくづく感じたわけですが、みんな本当に辛抱強く一生懸命がんばります。それで、しかも人に対して感謝する心というものをきちんと持っている皆さんたちばかりでありまして、そういう意味でボランティアとの繋がりもできたり、いろんな交流の場もこれから広がってくるチャンスはたくさんあるんじゃないかというふうに思います。鳥取でも、ここに来てもらってやっぱり一緒にこんな体験したよっていう思い出を持って帰ってもらってますので、その後の交流が続いたりという事もあるわけでありまして。ただ実際地震の時、やっぱりそういう人の繋がりの中で生かされたなあという思いを持っておられる人も多いです。例えば私も出会ったことがあります、南部町の金山というところに笹谷さんという、本当にある意味チャーミングなお婆さんがいらっしやまして、その方も地震の時大変だったんですね。家が壊れてしましまして。それでビニールハウスの中で過ごすとか。それから「避難所まで行くのに遠くてかなわん」と。それでテントを張って暮らすとかですね。そういうことをされたわけでありまして。我々のほうの住宅復興補助がありまして、これで家を建て直そうと。もうお一人であったわけでありまして、旦那さんがもう他界されているんですが、家を守らなければならないと。自分はあと何年生き

られるか分らんけれども、やっぱりお位牌を置いて家を守らんといけん。それで家を建て替えられたわけです。その家にお邪魔したんですけど、そうしたら庭に季節外れで真っ白いテッセンの花が咲いているんです。そのテッセンを見ながらニコニコ笑って、「まあ地震でいろいろ大変だけど、こんな時にも白く咲いているテッセンの花を見ると、私も頑張らんといけんと思いますわ」と。その後もテレビに出たりされている方ではありますが、「やっぱり人から支えられているんな温かい人に出会えたのが、一番この10年間で良かった」というような話をされています。それぞれの思い出が地震の後、生まれたように思います。顔が見えるネットワークっていうのが、私は中山間地、鳥取県だとかそういうところの良いところじゃないかなあと思います。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。先ほど泉田さんも言われましたけど、グリーンツーリズムですかね。中山間地の自然の素晴らしさみたいなものをやっぱりもっと積極的に都会の人たちにも理解してもらおうっていうようなことが必要な感じがするんですが、そのあたり自然の素晴らしさみたいなことで少しご意見があれば、よろしくお願いたします。

○ 泉田

6年前の地震で被害を受けた地域っていうのはまさに棚田が広がって、そして人が、人と人と共同体で村ごとに生活をしているという日本の故郷そのものというような場所だったと思っています。外国から視察に訪れた方々をご案内をしました。こういうふうに言われました。「とにかく大都会で時間に追われて生活をしていると、天気は自分の生活を合わせて、そして冬の間は一年間の

垢を落とすようなじっくりとした時間を濃密に家族、それから集落の人と一緒に過ごせるということをもっと物凄く贅沢な生き方に感じる」と。「泉田さん、ここは本当に理想的な場所ですね」というようなことを言われました。これは心の健康を保つという意味でも、大都会で時間と競争に追われて生活をする。そういう生活もあっていいと思うんです、勿論。しかしながら、疲れた時に癒しを求めるところっていうので、自分の帰る場所、居場所っていうことを共有をしてもらう、そういう交流ができていけば大変素晴らしいなというふうに思っています。そのために都市との交流の仕組みっていうのを今模索をしているところです。それと同時にやっぱり良い物があるんですよね、その土地土地に。農産物もそうですし、それから震災を経験をしたことによって新しく防災グッズが相当生まれました。新潟県で。実はいがた産業創造機構ってあるんですけども、ここもサポートをして防災時に役に立つ商品を大量に開発をしました。いろんなフェアにも出していますし。それから人の気持ちっていうのは、助けてもらったという感謝の気持ちはどこかでお返したいというのが芽生えるんですよね。どこかで大変なことがあるっていったら、助けてもらった方々が炊き出しに行ったりですね。今度はボランティアに変わっちゃうんです。そこでまた新たなネットワークができたり、なんていうことになっていまして。経験をお伝えをする。そして、また災害を通じて不便だったために開発をしたグッズがまた村を元気にしてくれるというようなところもあるんじゃないかなあと思っています。行政でもそうだと思うんです。実は室崎さんとはいろんなところでお会いさせていただくんですけども、これも災害がなければたぶんご縁がなかったんだろうというふうに私自身思っていますし。それから、こういうこともありました。私、これも就任した直後に兵庫

県の井戸知事からも電話をもらったんです。兵庫県はご存知の通り阪神・淡路大震災を経験しています。そして井戸さんから言われたのは、「泉田さん、阪神・淡路を経験した局長をお送りしましたので使ってください」と。「送りましょうか」というんじゃないんです。「もう送った」という過去形でした。さらに実はこの時凄いなと思ったのは、兵庫県の豊岡で水害が起きていたんですよ。新潟県からはボランティアが向かっていたんです、豊岡に。自分のところが地震だっていうんで途中で引き返して来たんですけども、兵庫県というのは水害に危機管理で対応しながら、新潟県に局長を送る能力がある。これは凄い。まあ、二重辞令になっているんで、今そういうことだったのかと。今は、新潟県も二重辞令にして、いわゆる予備役を設けていて、いざっていう時に対応できるようにしているんですけども。そういったお付き合いをさせていただく中で、本当にネットワークがネットワークを呼んでいると。最近「防災マフィア」と私は名付けているんですが、防災を専門にやっている人のネットワークの中にかに貢献をしていくかということが、いざという時に自分に跳ね返ってくる。それを身を持って。やっぱりあと感謝の気持ちがどうしても出ちゃうんだと思うんですよ。石川県で地震があった時に実は行政もサポートをしましたし、被災された方々もボランティアで行きました。その時に輪島市長さん来られて、「いやあ、泉田さん助かりました。あの時、慣れていなかったんで、人を送ってもらってどれだけ安心できたか」と。実は同じ話を私が井戸知事にしているんで、デジャブーを感じている感覚っていうのがあったんですけども。まさに本当に苦しみとか、辛さっていうのが分かっている者同士がまた強い絆を拡げていく。それが魅力を発信してくれることに繋がっていつてくれて、日本全体に、また世界にも繋がるかもしれな

いですね。四川の大地震の時には被災者が来てくれました。「どうやって復興するんだ」というような話で、兵庫と新潟に来てくれたんですけども。そういうネットワークを広めていく中で、みんな助け合いの精神を作っていくことがやっぱり魅力の発信に繋がるかなあというふうに思っています。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。あと少し中山間地の良さというところで何かご発言ありますでしょうか。皆さんの話は、中山間地の人の良さに目がいきがちですけど。はい、泉田さん。

○ 泉田

すいません。いっぱい喋って申し訳ありません。危機はチャンスと捉えるということも重要だと思っています。台湾でも地震があったんですけども、台湾で被災をした地域はその後元気になったという話がありました。視察団も送りました。結局何をやったかということ、これは被災者の気持ちとの関係で直ぐやるといろいろ怒られるんですけども、災害の記録を留めるという事をやりました。結果として、そこで地震にどう対応するかという国際会議が開かれる。そして見学者が訪れるというような形で、実際にこの現場に入っただけ。入っただけといい物があるんですよ。特産品。こういった物も買って行っていただけると。先ほど平井知事からも「ネギ買って帰れ」というようなこと言われましたけども。山古志だと「かぐらなんばん、買って帰ってね」とか、やっぱりあるわけなんで。そういう形で人が来てもらえるような施設を造っていくというのも計画をしています。実は先ほど冒頭申し上げた河道閉塞・震災ダム。沈んだ家っていうのは買い取ってもらえました。買い取ってもらったっていうのは、河

川なので国の所有物として買い取って、それが被災者の生活再建に当てられるというような対策を採ったんですけども、本当であれば河川の中にある家って壊さないといかんという事になるんですけども保存をしています。いろんな理屈を付けて。そうすると、ここを見に来られる方が多いんですよ。地すべりの防止をするためのありとあらゆる施策を投入しましたので、技術系のエンジニアとか、それから技術系の行政も世界中から見に来てもらう。どうやって防災をするか。そうするとそこで会議が行われることができる。そうすると、またそこでいい温泉がありまして、蓬平温泉というんですが。夜ですね、舞台が川の反対にあって女将さんが踊りまで見せてくれるっていうようなところ。これがまた評判を呼んでいるというようなこともあるので、この震災の傷跡を残してまた次に繋げていくという中での魅力の発信というのもあるのかなあと。当然もう震災の記憶は消したいので全部壊してくれと。記憶から消してくれと言う方々と、それから将来のためのモニュメントとして残そうじゃないかと。コンセンサスを作るっていうのはなかなか大変なんですけども、それができればきっと私はプラスになると思っています。日本全体で見ても、確か有珠山の近くで住宅が被災したあとを残しているようなところもあったかと思いますが。記憶を将来に残す、それから阪神・淡路のあとも壊れた岸壁をそのまま残しているというエリアもありますし、それと同時に魅力を併せて発信していくというハード面での対応というのにも必要なのかなあというふうに思います。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。中山間地とか、被災地の魅力をしっかり評価をして、それを誇りにして未来に繋げていくっていう話だろう

と思うんですけども。いろいろ意見を伺ってきたんですけど、会場の皆さんはひよっとしたら欲求不満で、「ちょっと俺はこう言いたい」という方がおられるかもしれないので、もしここで会場の皆さんで発言なり質問等がございましたらと思うんですけども、いかがでしょうか。たくさんおられるので手を挙げるのは勇気がいると思いますけれども。いかがでしょうか。じゃあ、手をあげておられるので、よろしくお願いいたします。

○ 小谷 博徳 (日野ボランティア・ネットワーク代表)

日野町のひのぼらねっと代表の小谷と申します。欲求不満は全くありません。昨日と今日2日間に亘ってこのフォーラムを聞かせてもらって、この震災から10年という足跡の中で本当にたくさんのお話を学ばせてもらいました。その一つは、昨日の車座座談会の中での中越の稲垣さんや三宅島の宮下さん。それから四国の23世帯50人、寝たきりが11人の集落でヘリコプターの基地を造っているんだという細川さん。本当にこのフォーラムに感動をいたしましたので、その気持ちを今日伝えたいというふうに思っております。

それから、今まではどうして被災から人口の減少を守るかというスタイルだったわけですけど、これまでの10年は私の町でも1年に80人ぐらい減っておるわけです。中山間地において本当に限界集落がどんどんできていく中で、今、平井知事が言われましたようにこれからの10年は、稲垣さんも含めて、よそ者をどう受け入れる度量がその町とか、集落にあるかという部分に掛かっておるんじゃないかと。私は限界集落の再生の実験として一民間人として1ターンで農業研修生を受け入れておるわけです。私は彼が私らの集落をこれから守ってくれるんじゃないかなあというふうに期待をしておりますし、そういうふうにしてい

かんといけんというふうに思っておるわけです。そういう意味で今回の2日間のフォーラムは、これからの10年を十分に示唆していただいたフォーラムであったなあという感謝と感想でひと言送りたいと思います。ありがとうございました。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございました。まだ少し時間がございますので、ご発言いかがでしょうか。よろしいでしょうか。じゃあ、少しこちらでマイクを使わせていただきたいというふうに思いますけれども、今までの話を私なりにまとめさせていただいて、その後ひと言ずつ最後に皆さんに「これだけ言い忘れた」ということをお聴きする時間を持つと思うんですけど。

その前にちょっと私が簡単なまとめをさせていただきます。今日の全体を通じてのキーワードは、人と人とのネットワークというか繋がりだと思うんですね。震災という事を契機にしていろんな繋がりが生まれてきている、ということです。先ほどの日野のボランティアネットワークの方のご発言は、神戸と鳥取の繋がりを強く感じさせます。阪神大震災が一つの契機になって、それがこの鳥取県西部地震に繋がりを、台湾にも大変な地震が起きて繋がる。鳥取から台湾の繋がりは、中山間地の防災ということで中越のところで一つの大きな集約が出来る。その中越の経験が今度は四川に行って、四川の山間地の復興に。まさに世界が災害で繋がりを、被災地ネットワークみたいなものを生みだしている。日本の被災地が繋がりを、お互いの経験を持ち寄りながら、より高い段階の地域社会づくりが始まっていると実感していません。単に繋がっているだけではなくて、繋がるごとに地域づくりなり復興のあり方というのがレベルアップしている。これは凄く大切なことだろうというのが一つですね。

2つ目は、若者とよそ者のネットワークです。1番目は、被災地同士のネットワークでしたが、2つ目は、やはり若者とよそ者と被災地が結びつくということです。どうやって若い人たちを。ところで、被災地の外からの若者もいるけど、被災地の中の若者もいると思うんですね。今日の午前中にも山中さんのほうから少しご報告がありました、昨日の報告ですよ。小学生の防災教育の話。とっても素晴らしい取り組みを鳥取でやられているんですけど。子どもたちに教訓を体験をしっかりと伝えながら子どもの力を引き出していく。若い人たちがこれからの将来の地域の担い手となっていく。そこにどういった繋がりを作っていくのか。そういう新しい試みも今生まれつつあるように思うんですね。私から見ると、松田さんは十分大きくなられたわけですけど、どんどん素晴らしく大きくなっていかれている。まさに人を育てていく機能というのを災害というのは持っているように思うんですね。そういう意味での若者との繋がりをどういったふうにつくり上げていくのか。その繋がりの関係を中山間地の次のステップのエネルギーにしていくという発想はとても重要で、今ご提案がありましたように若い人たちをどんどん中山間地に引き入れる。中山間地そのものは若者にとって魅力を持たないといけないし、それから「開かれる関係性」という。先ほどの議論で言うと、直後にボランティアが来てもみんなやや閉ざしていたと。そこをオープンなシステムにするということが必要です。たぶん、それは中山間地なり、地方から開かないといけないというふうに思います。まさに若い人たちを受け入れる繋がりを作りのための扉を開くっていうようなことが、大切だというふうに思います。

3番目の繋がりをいうのは、最初に話したコミュニティの繋がりになると思います。要援護者の問題というか、安否確認の問題というか、

あるいは地域の力を付けるために地域の中での繋がりがどうやって作っていくのかっていう問題が重要です。稲垣さんの話ではちょっと今までは後ろ向きの繋がりがあったけど、その中の繋がりがどうやって前向きの繋がりにしていくのかっていう。一つの地域社会の中でそこに住んでいる人同士の繋がりがみたいな。さっきの顔の見える関係が中山間地にはあるんだという意味でいうと非常にメリットなんですけど、そのメリットをもっと発揮していくような繋がりと云うか。だから現状に満足するのではなくて、中山間地の人の顔の見える関係みたいなものをもっともって活かした町づくりとか、村づくりとかを考えていかないといけないというようなことを思うんですね。

私自身が議論を通じて強く感じたのは、いろんな形の繋がりをしっかり作っていかないといけないということです。そのための条件が中山間地にはいろいろある。もう一つ言うとね、僕は自然と人間の繋がりが欠かせないと思います。私の気持ちは、よそ者としてここに来て、大山を見るだけでももの凄く救われるんですよ。自然の素晴らしさっていうのをやっぱりみんな。その自然は単に自然じゃなくてそこに人がいて、人と自然が繋がっているから素晴らしさがあると思うので、やっぱり自然と人間が繋がるということも必要だと思います。今日の話を私なりに強引にまとめると、そういう繋がりがあっていうのをしっかり作らないといけないということなんですね。

さて、それぞれ一言ずつ、これだけは言い忘れたということがあれば、お一人2分弱ぐらいでお話いただければと思います。私のまとめに対する反論でもかまいません。今度は平井知事さんから順番によろしく願いいたします。

○ 平井

今日は本当に素晴らしい貴重なご意見をたくさ

ん賜りまして、ありがとうございました。今も小谷さんからお話がございましたけども、「これからの10年をどうしようか」。それを考えるきっかけになれば本当に良いことだなあとというふうに思います。こういう防災の関係でいきますと、我々は被災地間でネットワークを作ろうじゃないかという話が今日盛り上がりましてけども、実は鳥取県は、今、徳島と防災の面で交流をしています。それは向こうが東南海地震にやられる時に我々は絶対やられないと。逆に我々がやられる時には彼らは絶対にやられない。だから、そこで助け合おうじゃないかと。本当はこうやって被災地の知恵というものがもっとシステムチックになって、それがこれからおそらく東南海だとか、関東とかでいろんなところで大きな地震が有り得るわけでありまして、そちらのほうに活かされるようにするのが今度は次の我々の使命かなあと。そんなような気がしますので、こういうネットワークが生きてくればいいなあと思います。それから子どもたちも将来がある人たちですけども、被災体験を持っている我々が、そこをしっかりと強い人間に育てていかなくてはいけないだろうということがあります。地域でもいろんな知恵がありまして、先般も「会見冬の里」というところに行きました。これはやはり震災もあつたわけでありまして、例えば会見小学校がやられちゃったんですね。その「会見冬の里」の皆さんは今、パソコンを使いまして自分たちで手作りでハザードマップを作ったり、いろいろとやっているわけでありまして。こういうようにみんなで寄せ合っていくと、良い物ってきっと生まれると思うんですね。こうやって巡回して売っている車が、例えばそこで野菜を農家のおばさんから買って他所のところに売りに行くとかですね、いろんなことが構想されたりしています。どんどんと。実は今まで閉ざされた世界だと言われていたところを作り変えていく

ムーブメントが生まれて来たんじゃないかと思うんですよね。それを私たちは活かしていければいいんじゃないかなあと。そうすると、地震が今後の10年に生きて来るんじゃないかなあというふうに思います。この近所の船通山というところは例の須佐之男命が戦ったヤマタノオロチの伝説がありまして、それでヤマタノオロチを退治したところ、その体内の中から天叢雲剣が出て来たというわけであります。そういう伝説の地がこのすぐ近くにあるんですけども。今回の地震はひょっとするとヤマタノオロチが起こした地震かもしれないと。そのヤマタノオロチのこの地震の復興を遂げた後、中から出て来た天叢雲剣という剣を今度は我々が手にしたわけでありまして、こうした知恵だとか経験をこれからの地域づくりに活かしていければ、無駄な10年ではなかった。有意義な10年だったと、後で振り返るんじゃないかなと思います。

○ 室崎

はいどうもありがとうございます。それでは松田さん、よろしくお願いします。

○ 松田

今日は本当に勉強になりました。ありがとうございます。思い出したんですけど、私、能登半島地震から1年目のフォーラムの時に、壇上に地元の方がどなたもないことに怒りを覚えたのを思い出して、たぶん日野の方がここに上がるべきだったんじゃないかなあと思いました。よそ者をこうして受け入れていただく鳥取県には感謝をしたいなと思います。

私も先ほど言われたように、これからの10年のことを今行っている商店街を思うと、あんまり明るいことばかりではなくて、やっぱり跡継ぎがいる店っていうのはほとんどないので、本当に消

えてしまうのかと暗い気持ちになることもあります。だから本当に明るい話だけではないんですが、こうなった以上は、たぶん一生のスパンで係わり続けることになることになるんだと思いますので、それはそれで大事にしていきたいです。繋がりとのことだったんですけども、被災地の方もやっぱり伝えたいという気持ちがありますし、それから我々も名古屋にいるボランティアもとっても学びたいという欲は強いです。ですから、そうやって市民が誰かが何かをしてくれるんじゃないかと、自分たちで学びたいって思うようになってきたというのはとっても大きなことだと思いますので。その生きたいとか、学びたいっていうような気持ちがちゃんと繋がっていけるような仕組みを、私は市民団体ですので小さい規模ですけども、仕掛けをいろいろとこれからも作っていったらいいなあというふうに思います。よく行政がやってくれないから、自助だ共助だっていうんですけど、それは半分合っているんですけど半分違って、やっぱり本来的に人間は助け合いたいという気持ちを持っているって、凄く防災の仕事をしていると思いますので、そこから始まる共助じゃないと意味がないのかなあというのをとても最近思います。

○ 室崎

はい、ありがとうございます。稲垣さん、よろしくお願いします。

○ 稲垣

はい。本当にお招きいただきまして、ありがとうございます。長時間かなあと思ったんですけど、あっという間でございまして。最後に御礼を込めてということですけども、僕は2つ申し上げたいと思います。震災で経験した教訓、あるいは経験をやっぱりこれからの新しい社会づくりと

か、地域社会づくりに活かしていかなくやいけないだろうなあというふうに思うんです。そういう意味では、やはり繋がりが大事だということです。そういう中で繋がりが継続して広がる、継続して太くなる。そういう仕組みをやっぱり作っていかなくやいけないだろうと。だから先ほど泉田知事も災害のボランティアという中で、いわゆるやりたい人とやってもらいたい人を繋げていなくてはいけないとおっしゃっていましたが、でも、そこはなかなか上手くいかないんだという話なんですけども。ただ、この震災を経験しながら中越では結構それがもうだいたい「あーこんなイメージで繋げていけばいいんだなあ」というのが分かってきたわけですよ。それが今度は中山間地の場合の「1ターンに行ってみよう」とか「農業をやってみよう」と思う人と、「いやーうち助けて欲しい。うちの後継者は、いないぞ」というところをどう繋げていくか。これだって同じような話で、やっぱりここも繋ぎ手が凄く大事なんだろうと。この繋ぎ手、いわゆるそういったものを繋ぐという仕組みが平時からきちっとあれば、ずっとお互いに都会も中山間地も元気なんじゃないかなあと思いますし。平時はそういう繋がりを作り出す人がいて、災害時にはその人が災害のボランティアの繋がりづくりのコーディネーターをしてもいいんじゃないか。そんなような機能というのが凄く大事なんじゃないかなあというふうに思った次第です。ですから、そういったものをこれからの復興の取り組みのなかで模索しながらそういう仕組みづくりをしていきたいなあと思います。それからもう1つは、実はやっぱり我々、大変全国の皆さんからお力を借りて復興の途上にあるということです。そういう中でやっぱり我々も、我々の得た教訓を全国にお返ししていかなければいけないと思っています。実はこれは宣伝なんですけども、皆さん方の今日の資料にもお配りさせ

ていただいていますけども、シンポジウムのチラシがございます。これは新潟県の長岡市で行う地域への人的支援を考えるとというシンポジウムなんですけども、実は今、先ほど復興支援員というお話もさせていただきましたけども、平成18年から総務省で集落支援員制度というのが生まれまして。さっき言っているように「よそ者」の役割をする。あるいは誇りを取り戻すというような役割の支援員が全国に2,000人ぐらい配置されているんです。ただまだ数年しか経っていませんので、みんな模索しているんですね。その中で全国ネットワークを作ることになりました。事務局がご当地に近いんですけども、広島県の神石高原町というところ。それからサポートセンターが、これも近いところで島根県の中山間地域研究センターと、我が中越防災安全推進機構の復興デザインセンター。実はこの集落支援員の人材育成を西日本は島根県で、東日本では新潟県でやっていきたいという感じで、そんなようなネットワーク立ち上げのシンポジウムを行います。「新潟まで来い」とは言っていないけども広島ですから、ぜひとも10月の13、14日に行っていたきたいなど。やっぱりどこも過疎で困っている、全国に困っている方が大勢いらっしゃるから、我々は震災でお世話になったお礼をこういった形で全国の過疎で悩んでいる地域の皆さんにお返しをしていくこと、これも大事なのかなあというふうに思っています。ありがとうございました。

○ 室崎

はい、どうもありがとうございます。最後になりましたけど、泉田さんよろしくお願いいたします。

○ 泉田

今日はですね、発災直後からの課題、そしてま



た復興する過程の課題と、大変幅広くいろいろな話を聞かせていただく機会を設けていただきまして、本当にありがとうございました。大変参考になりました。この中山間地域という切り口で捉えた時に改めて考えてみると本当に大きな課題を多々抱えていると思います。それは日本の縮図でもあるというふうに思っています。高齢化が都市部に先駆けて進行している。そして、また情報というのも伝達手段に限られる。衛星電話を入れればいいというほど簡単ではない。さらに交通の問題もあります。新潟県では被災地が復興過程で営業をしていたバスが撤退してしまうという事態にも直面をいたしました。この中山間地域の課題というのは、稲垣さんも言われた通り平時からあるんです、本当は。それが震災時・災害時には物凄く大きなものとなって顕在化してくるということだと思っています。即ち、この災害からの復興に対応できるっていうことは、これも私、稲垣さんと全く同じ考え方なんですけど、平時の行政がどうあるかということに大きなヒントを与えてくれると。即ち、復興はピンチなんですけどもチャンスであると捉えて、対応を作っていくことが行政の精度を上げていくということだと思っています。例えば交通でバス会社が撤退した後、何が起きたのか。NPO 法人が乗り合いバスを運行するという仕組み。これは経費的には格段に下がって、且つオンデマンドバスに近いような形で交通が確保されるということで、住んでいる方にとってはむしろ良かったかもしれないというようなサービス。これは被災地から始まったんですけども、これ全県に拡げていくということになりました。そして、またこれも稲垣さんから何回も宣伝をしてもらっていて、確かに県で制度化したんですけども、地域復興支援員の制度なんですけど、現場から凄いニーズがあったんです。せっかく来ていただいている方々、何とかならないかと。一

緒に交流を続けたいということで、サポートする仕組みっていうのを入れました。こういったことができることによって、平時の行政の確度が上がって、そして地域が元気になってくるんじゃないかなあという期待感も持っています。まさに被災から復興していく地域同士、いろんな施策というものも現場の声っていうのもこういった形で直接聞かせてもらいながら、この仕組みを改めていくということで日本全体が元気になっていく。また、被災地自身が元気になることが、災害で支援をしていただいた皆様へのご恩返しというつもりで、この復興活動を続けていきたいなというふうに思っています。本日はどうもありがとうございました。

○ 室崎

本当にどうもありがとうございました。ちょうど時間と言うか、少し時間が2分ほど超過いたしました、皆さんにご迷惑をかけたかも分かりませんが、本当に長時間ありがとうございました。今日は朝からずっとお聞きになった方もおられて、お疲れかとは思いますが、先ほどのご発言にありましたように、少し今日の話をお役にいただければありがたいというふうに思います。長時間のご清聴、本当にどうもありがとうございました。

○ 司会

室崎様、パネリストの皆様、本当にありがとうございました。皆様、今一度、盛大な拍手をお願いいたします。以上を持ちまして、「鳥取県西部地震から10年目フォーラム」を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

(おわり)